

中等教育漢文講義之内

三木五百枝先生講述

十六夜日記講義

現今世に銀筆杜撰の類書多し  
乞ふ購讀の精算は三木氏講述  
の十六夜日記講義と各書店に  
就き御指名あらん事な

東京書肆

誠之堂藏版

915.44M 4670 (8)

中華書局出版

# 十六夜日記講義

## 緒言

一本書は、尋常師範、尋常中學、高等女學校などの、國語科の參考書、又は、各學校國語受驗者、獨修の便に供せんとして、講述したるものなり

一前述の目的なれば、語はなるべく卑近にし、又、あまりかけ離れて義を解かず、たゞ、本文の字句にしたがひて、講じたれば、或は、煩しき所もあらん、又、考證に亘る類は、多く省きていはず、これ、この書の性質、さるかたに従ふを便利とするはなり

一本書は、紀行文なれども、尋常のものとは、其の趣を異にし、常に、歌道を憂ひ、家を思ひ、子を愛しむ情、筆端に溢れたれば、よくこれを讀まば、たゞに、國語に通ずるのみならず、又、道義の觀念を養ふに足るべし

一本書の歌は、かの新古今時代の風趣あれば、よくこれを味はゞ、其の時代の歌のさまをも、うかがふことを得べし、ここに著者の歌は、祖先の遺風ありたるものなるをや

●十六夜日記講義 緒言

# 枕乃草紙詳解

全三冊

合本洋裝 紙拾二頁 拾五外 郵八錢 宛

文科大學教授文學博士 黒川真頼先生序  
 文科大學教授文學士 飯田武郷先生序  
 文科大學教授文學士 芳賀矢一先生序  
 松平静先生講述

發行所 東京市神田區 鍛冶町四番地 (電話本局九百四九) 誠之堂書店



300005

一本書を読みし者は、又、残月鈔を読むべし、残月鈔は、高田與清の、この書を註釋せるもの、煩簡宜しきを得ざる所少からねど、語釋故事などは委しければ、必ず参考に供ふべし

一本書は、學業の餘暇、をりく筆を執りしものなれば、其の時々により、他少講述の趣を異にしたるもあるなるべし、まして、淺學寡聞の身、誤謬また必ず多からん、讀者、幸に批正を惜まれば、たゞ余の幸のみにあらざるなり

明治廿九年八月

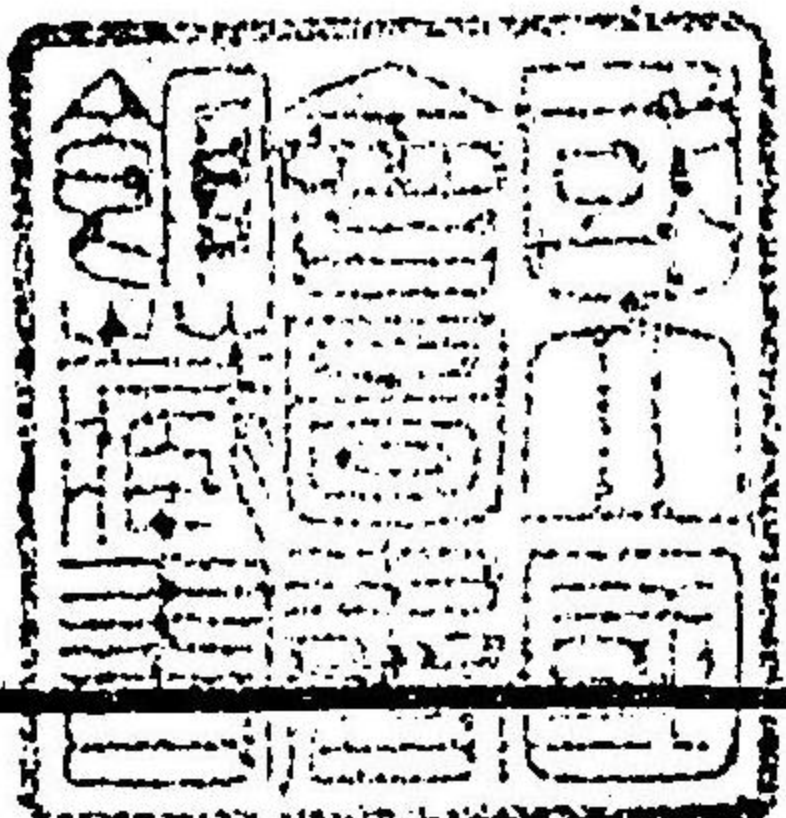
講述者志るす

# 十六夜日記講義

三木五百枝述

## 開題

この日記は、阿佛尼といふ婦人、紀元千九百三十七年、(後宇多天皇の建治三年)所産のたり、京都より鎌倉へ下りし途中の事、また、鎌倉に在りし間の事をも、書き記し、ものなり、阿佛尼は、藤原爲家卿の室にて、平の度繁といふ者の女なり、始は、順徳天皇の后、安嘉門院に宮仕して、四條にも、右衛門佐ともいひしが、後には、爲家に嫁して、爲相等五人の男女を生みぬ、爲家薨去の後、髪を薙り、法名を阿佛尼といひたるなり、さて、其の鎌倉に下りたる故は、もと、爲家の家は、祖父俊成卿の代より、和歌を以て世に聞こえ、朝廷の寵遇も厚かりしかば、建仁元年、和歌所なをも設けられ、この道隆盛なるに至れり、其のそり、和歌所の費用を辨せんため、播磨國美祿郡細川庄と、近江國坂田郡小野庄とを、寄せ置かれしが、俊成の子定家卿、また歌に名高く、その子爲家また名譽ありしかば、勅を奉じて歌集を撰びしことも、一家數度に及べり、かく勢強くなるにつぎ、この兩庄も、いつか、一家の私領となり、爲家に傳はり來りしが、爲家には、爲相等の外に、先妻の子、爲氏、爲政といふ者ありたり、故を以て、爲氏まづ、父の讓を受けて、この兩庄を傳へしが、何事にかありけん、親不孝の事ありたりとて、爲家、これを爲相に與へぬ、爲家薨トて後、爲相幼かりければ、爲氏これを押領して、返すことなかりき、阿佛尼これを愛へ、かくては、爲相のためののみならず、父の遺命



にも背き、和歌の道も盛んならう、いかにもして取返さんと、種々心を碎きしが、たゞ鎌倉に行きて、裁判をこふはか、道なかりければ、つひに、執權北條時宗に訴へたるなり、然れども、當時、國家多事なりしかば、裁決延引したるうち、阿佛尼は、弘安六年九月、彼の地にて死去し、爲氏も、この事のために鎌倉に下り居りしが、また薨じぬ、されど、其の訴訟は、阿佛尼の勝となりて、かの地は、爲相の所領となりたりき、これその概略なり。

この番の題號を十六夜日記といふは、都を出立せし時、十六日にて、その夜、近江國野洲郡、守山といふ宿につきたる條に、「今日は十六日の夜なりけり」とも又鎌倉につきて後、都より「ゆくりなくあぐがれ出でしはよひの月や後れぬ形見なるべき」と詠みて、送られたる歌の下に、「都を出でしことは十月十六日なりしかば、いさよふ月をばほしめし忘れりけるにや云々」なをもあるにや。阿佛尼の著述は、このほかに、庭の訓、うたねの記、夜の鶴などあり、詠歌も、あまたありて、勅撰歌集の中に入りたり。

むかし、壁の中より、もとの出でたりけん書の名をは、今の世の人の子は、夢ばかりも、身の上のこと、は、くらさりけりな。水菫の岡の葛葉かへすくも、書さおくあとなじかなれとも、かひなきものは、親のいさめなり。また賢王の、人を

そてたまはぬ政にもれ、忠臣の、世をさもふ情は、もすてらるゝものは、數ならぬ身ひとつありけりとも、おもひ知りあがらまた、さていもあらで、猶、このうれへこそ、やるかたさく悲しけれ

これより、以下「いさよふ月」にさそはれ出でなんぞぞ思ひなりぬる」といふ文までは、出立の理由をいへるなれば、其の心して見るべし。○壁の中よりもどか出でたりけん書 孝經をいふ、古文孝經孔安國の序に、魯の恭王、人をして、孔子の講堂なりし所を境らしめしとり、壁中の石函にて、孝經を得たりと、記せるこれなり、けんは、過去の事を想像していふに用ふる辭、出マオトカイフなを譯すべし。○夢ばかりも 夢程もにて、いさよふかも、少しも、といふ處。○身の上へのこととは知らざりけりな 自身に關係あるものとは、知らずにあることかなの意、けりなは、驚歎の意をあらはす辭なり。○水菫の岡の葛葉 水菫とは、草なごの、生さくを榮えたる莖幹をいひて、岡といふことをいはひために置けるなり、かゝる類の詞を枕詞といふ、また、筆のことも水菫といふは、下の書くといふに、縁故あらせんとも、わくはへり、葛は、藤草にて、其の葉は、風のために、よくうら返るもの故、かへすくといふことをいはんために置けり、さて、この條と次の條とは、古歌に「水菫の岡のくす葉を吹さかへし、たも知る見等がみえぬころかも」又「かひなしと思ひな消らそ水菫の、あぞ千年のかたみなるべき」と、あるなほによりて書けるなり。○かへすく 幾度も、胸の中に繰返し思はるゝこと、上よりの韻は、葛の葉を葉かへすことはいへり。○書されくも 爲家卿の、遺

されし領分の譲り状、即、證書なり○かひなき かひは詮の義、効能なしとの意○さし 教誨、  
又は禁制○敷ならぬ身ひとつ 人数として、世間に計算せられぬ身體一個、阿佛尼、自身のつま  
らなきといふ○なりけり マアツヤツイ、歎息のことは○さてしもあらで しかありても、其儘  
のみに、懸念せられずしてといふ意○種このうれへこそやるかたなく悲しけれ ヤハツ、上には  
へる心配が、一番、切に身に染みて悲しく思はるとなり、このうれへは、領地の事を、世に照みられ  
要なり、やるかたなくは、他に移しかふることの出来ぬは、切なるをいふ大意 以前、漢土に  
て、壁中より取出だしたりといふ、孝經の孝といふことを、現今の子息は、少しも、自身に關係ある  
事柄とは、知らずに居る、實に歎息に堪へず、それ故、亡夫爲家卿の書き置かれし諱状は、極めて確  
實なれども、土地は、奪はれたれば、其の効なきものは、親の禁誡を知らず、又、聖天子の御仁政にも  
救はれず、良臣の世を感む心にも助けられぬは、世にも算へたてられぬ吾身のみである、心には  
知りてあれど、また、左様にばかりいひて、思ひ切られず、やはり、この世に棄てらるゝ心配が、こと  
に悲歎せらる

更に、おもひつゞくれは和歌の道は、たゞ、實すくなく、あだなるすまひばかり  
と思ふ人もやあらん。日本の國に、天石戸ひらけし時、四方の神等の、神樂詞を  
始めて、世を治め、物を和ぐる媒となりけけるとぞ、この道のひとりたちは、ある  
とおかれたりける

さらにかもひつゞくれば 又別に熟考すればとなり、つゞくるは、久しく考ふること○やまどうた  
の道 大和歌の道なり、詩を唐歌といふにより、それに對して、三十一文字なみの歌をかゝいふ、  
こゝは歌の事はといふ意○あだなるすまひばかりと云々 つまらなき、むだの遊樂のみのこと  
なりと、考ふる人も、或はあるべきかとなり、すまひは、何にても、心の趣くまゝに、なす爲樂を  
ふ、こゝは、慰の意、あらんの下に、されど左様には非ずとの意を含めり○日本の國に云々神樂詞を  
はつめて これは、故事を擧げたるなり、その故事は、神代の昔、須佐之男命といふ神まじくして、  
御心に協はざることありしかば、天照大御神の、田地宮殿等を損つ、暴行をなし給へり、大御神怒り  
て、天岩窟の内に、閉籠り給ひ、世の中聞くなりしを、四方の諸神歎きて、種々の物を作り設け、音響  
を奏して、大御神を岩窟より出だし奉れり、其時、世間、明になりしかば、諸神諸共に「あはれ、嗚呼」  
あな、おもしろ(嗚呼面白)あなたのし(嗚呼樂し)あなやけ(嗚呼明亮かけ)木葉の音と歌ひ給  
ひき、といふことなり、石戸は、岩にて作れる門戸、ひらけしは、開くやうになりしこと、神樂詞は、  
音樂を奏せし時、歌ひし詞をいへるにて、或は、當時、天宇受賣といふ神「ひとよた(一二)みよ(三四)  
いつむゆ(五六)な、や(七八)このたり(九十)も、ちよろつ(百千萬)」と歌ひ給ひしをいふ也、  
又は、上の「あはれ云々」の歌なりともいへ、按ふに、これは、確に一の歌を指したるにはあらで、音  
樂を奏せりといふにつきて、おほらかに、かくいひ傳へたるものなるべし○世を治め物を和ぐる媒  
云々 古今和歌集の序に「力をも入れずして天地をうごかし、目に見えぬ鬼神をもあはれとおもは  
せ、男女の中をも和げ、たけき武士の心をもなぐさむるは、歌なり」とあるを指していへり、なほ歌

の條をも見合はすべし、媒とは、間に立ちて雙方の介をするをいふ○この道のひじりたち 歌道に  
優れたる人等なり、ひじりは、聖の字、歌には、歌仙などいふなり、前にいへる、古今和歌集の序  
を書ける紀貫之等といふ●大意 又、別段に、よく考ふれば、歌よむことは、實用はなくて、たゞ、徒  
の遊樂のみと思ふ人もあるべし、されど、それは誤にて、我國の太古、天岩戸の前にて、神々の歌ひ  
給へる、神樂の詞によりて、天照大御神の戸外に出で給ひしが如き効あるを始として、後世となり  
ても、天下を治め、人心を和ぐる介となりたりと、歌道の達人は、書を遺し置きたり

さてもまた、集を選ぶ人は、例おはかれど、二度勅をうけて、代々にきこえあけた  
るは、類、なほ、ありがたくやありけん。そのあとにしも携はりて、三人の男兒と  
も、百千のうたのふる反故どもを、いかなるえにかありけん、預り持たることも  
あれど道助けよ、子をはくくめ、後の世をとへとて、深き契をむをひおかれし  
細川のながれも、故なくせきとめられしかは、跡申ふ法の燈火も、道をまもり、家  
を助けん親子の命も、もうとゆに、きえを争ふ年月を経て、危く心ほそきものか  
ら、何として、つれなく、今日まではなからふらん

集を選ぶ人は、集とは、歌の冊子なり、こは、勅命によりて、歌集を選ぶ人といふ○例多かれど  
後の醍醐天皇の御時に、紀貫之等の、古今集を選めるを始、村上天皇の御時に、藤原伊尹等の、後撰  
集を選める、其の他、拾遺、後拾遺、金葉など、皆この時より以前なれば、先例多しといふなり○二

度勅を受けて世々にきこえあけたるは、爲家の父、定家卿、二たひ勅を奉りて、新古今、新勅撰の二  
歌集を選び、爲家卿もまた、續後撰、續古今を選ぶ、その御代をいへば、土御門、四條、後深草、龜山、  
四天皇の御時なり、故にかくいふ、きこえあけたるは、歌集を選定して奏上したることなり○類なほ  
ありがたくやありけん、これに似寄りたる先例は、また、ありしこと稀なるべしとなり、ありがた  
しといへば、後世は、厚きよしなれど、古は、あること稀なる義に用ひたり、心得おくべし○そのあ  
とにしも携はりて、かく名譽ある家に關係しての意、あとは、跡目なり○三人の男兒ども、阿佛尼  
の子は、五人あれど、爲相、爲守、二人のはかは、僧と女子となれば、三人は誤なるべし、一説に、爲顯  
といふものありといへど、いかいあらん、或は上に二度とあるに對し、ふと三人と書きしにや○百  
千のうたのふる反故ども、爲家卿より譲られし、數多の歌を書きたる書冊、草稿等、反故とは、紙類  
に、文字などをかき捨てにせし類のものをいふ○いかなるえにかありけん、とは、縁の字のんを尋せ  
るなり、如何様なる因縁によりて、かゝる譯とは、なりたるにてあつたらうとの意、次の預り持たる  
といふにかゝる○預りもたる、もたるは、持ちてあるなり、右の草稿などを、阿佛尼の、爲家卿より  
預りて、所持し居るをいふ○道を助けよ、歌の事柄を助成して、隆盛ならしめよとなり○子をばく  
め、子女を養育せよとの意、はぐ、むは、もと、鳥の雛を羽にて覆ひ育ふを、羽合といひしが、轉  
じては、すべて、養育することをいふに至れり○後の世をとへ、死後の佛事を修せよとなり、後の  
世とは、佛教にて、過去、現在、未來の三世を立てれば、その未來を後の世といふなり、とふは、弟  
ふと同じく、死後の世は、極樂などいふ安樂の地にゆくやう、祈願するをいふ○とて、といひて、

或は、といふ意にての義、爲家卿の、阿佛尼等に、領地を譲れる理由をいふなり○深き契をひすび  
 おかれし 爲家卿の、思慮深き一通ならぬ約束を、阿佛尼と固め置きたるをいふ意なり、深きは、細  
 川といふに縁あれば、かくいへるにて、前の如き理由なれば、徒に土地を譲られしにはあらざるよ  
 しをいふ○細川のながれも故なくせせとめられしかば、播磨國細川庄を、何の理由もなく、爲氏の  
 ために奪取られしをいふ、せせとむは、塞ぎ止むるなり、地名を細川といふにつきて流をいひ、流を  
 いふにつきて塞ぎとむは、詞を風雅にしていへるなり、事實は、緒言を見て知るべし○跡とふ法の  
 ともしび 死後の爲を祈る佛壇の燈明をいふ、法は、佛法なり、佛前に燈火を供へて、後世を祈るを  
 以てかくはいふ、以下三句は、前の「道を助けよ云々」をあるに應ず○親子の命 阿佛尼爲相等の生  
 命なり○もろともにさえを等ふ 佛前の燈火と、母子の生命と、いづれも絶えんくとして、たゆ  
 むことの前後を争ふありまなりとなり、燈火の縁故によりて、生命のたゆるをも、消ゆとはいへ  
 るなり○心ばそさるものから 氣弱く悲しくはわれとの意、ものからは、ものながら、又、ものとい  
 ふ義にて、もの故の義にはあらず○何としてつれなく 何故心強くなり○今日まではながらふら  
 ん 今日に至るまで、生存せるならんとの意にて、右の如く、饑渴悲歎の中にあれば、疾くは、生命  
 は絶ゆべき筈なるに、絶えざるは不思議なりと、その有状を甚しくいへるなり○大意 さて又、勅  
 命によりて、歌集を選める人は、先例多けれど、二度勅を奉じて、御代々に奏上したる、定家爲家二  
 卿の如きは、未、稀なること、思はる、妻は、何の因縁なるかは知らねど、其の名家の跡に關係して、  
 二人の男子と、數多の歌書とを、亡夫爲家卿より預けられて所持すれど、主として歌道を隆にし、子

女を養育し、佛事を修すべきため、後々の事を慮りて、遣し置かれし細川庄は、故なく押領せられな  
 り、かゝれば、後世を用ふ佛壇の燈火も、歌道を保護し家を興すべき吾々親子の生命も、その滅する  
 こと、いづれか先なるを知らざるありまにて、年月を送れり、かく、氣づかはしく悲しき身な  
 ら、いかにして、平氣で、今日に至るまでは、生存し居たるものならん、實に不審なるはどなり

惜しからぬ身一つは、やをくおもひすつれども、子を思ふ心の間は、猶、しのびが  
 たく、道をかへりみる恨は、やらんかたなく、さては、なほ、あづまの龜の鏡にう  
 つさは、曇らぬ影もやあらはるゝと、せめておもひあまひて、萬のはかりを忘  
 れ、身をえうなきものにあはして、ゆくりもなく、いさよふ月夜、さそはれ出で  
 なんとぞ思ひなりぬる

をじからぬ身ひとつ 惜しきものども思はぬ身盤一個にて、阿佛尼自身をいふ○やすくおもひす  
 つれども 容易に思ひきりてしまへどもといふ意、死ぬも生くるも構はぬなり○子をおもふ心の  
 間はなほしのびがたく 吾が子のために、心配する親の心は、右の如くにては、ヤハリ堪へ難くあ  
 りとの意にて、古歌に「人の親の心は闇にあらぬとも、子をおもふ道にまよひぬるか」なるに  
 りて讀み、親の、子をおもふ心切なることば、前後の分別なきまゝに至るをよめる歌なり○道をか  
 へりみる恨はやらんかたなく 歌道の衰へんことを氣にかける心痛は、慰めんに所なくありとな  
 り、やらんとは、氣を暗らすをいふ○あづまの龜の鏡にうつさは 鎌倉幕府の、正しき裁判をうけ





ちるなり、つゝは、アの意、又物の重なる意なきに用ふる辭にて、こゝは後のかたなり〇ことにふれ  
て種々の事につきての意、ふればサツルにて、當時ある所の事柄にわたりてなり〇人やりならぬ  
道 自身にて態とする事柄の意、人やりは、他人に遣らるゝなり、こゝはそれにはあらで、自身にて  
察めてすとなり、古今集に「人やりの道ならなくに大方はいさうしといひていさかへりなん」とあ  
るを取りて文をなせり〇いさうしといひて 行くに困難なりとも〇あらで あらざる事故の意〇  
なにとなく 別段指すべき事もなく、又は、自然になせといふに同ト〇たちぬ 旅路に出立せしそ  
ふ、かくいひ置きて、次よりはまた、出立以前の事をいふなり、其の心して見るべし〇大惑 さや  
うにいひたればとて、昔の小野小町の如く、文屋康秀などが勝負といふわけにてもなく、又、葉平の  
如く、住ひよき國を搜索すといふにてもなし、時候は丁度、冬の來し最初にて、一定せざる天氣なる  
故、降りたり降むなんだり、雨も時々ふる上、風に先を争ひて散る木葉までが、己の悲歎のため  
出づる涙と同一に、甚しく散りなせして、何事に附けても哀に悲しくはあれど、自身に係れる爲む  
かたなき事柄なれば、行くに困難なりとて、止められやうことにもあらざる故、何故ともなく急ぎ  
て出立せり

めかれせざりつる間だに、あれまさりつる庭も籬も、まじつて見廻はされて、  
はしけなる人々の袖の争も、なぐさめかねたる中にも、侍従、大夫などの、あなが  
ち打屈したるさま、いと心苦しければ、さまゝいひこしらへ、ねやのうらを

みれば、昔の枕さへ、さながら變らぬをみるにも、今更かなしくて傍にかきつく  
とゞめおくふるさ枕のちりをだにわがたちさらは誰かはらはん

めかれ かれは離るゝなり、目を離さず、常に目にて見ることなくなるをいふ〇せざりつるはをだ  
に 爲すにありし時でも最早の意〇まがき 透間ある垣、四目垣の類なり〇まして見廻はされ  
て 今の有様にも増して、如何様になるべきかと思はるゝ故、自然、四方を見廻はすに至れりとな  
り、ましての下に「如何になるらん」といふ語を入れて見るべし〇したはしげ げは傍より其の權  
子をいふ辭〇袖のしづく、しづくは露の類、別を悲しむ人の袖に、多く涙のかゝりてあるをいふ  
其の涙即、しづくなり〇さ、さめかねたる 慰喻し難くあるをいふ、容易に、人々の悲歎を解さま  
らしめられざるなり〇侍従 爲相をいふ、侍従は役の名、當時の中務省に屬し、天皇の御傍に侍し  
て、種々の用事を勤め、時に諫を納れ、餘典を補ふことなどを職とす、爲相、當時、十五歳にて、この  
役なりしかば、常にかくいひしなり〇大夫 爲守をいふ、大夫は五位の通稱、爲守、當時十二歳に  
て、從五位なりければ、かくいひしなり、さてこの二人は兄弟にて、ともに阿佛尼の腹なり〇あなが  
ちに 常には無理にすることに用ふれど、こゝは甚しく、又は切になせいふ意〇打屈、まじは難  
勢を強むるために剛へていふことば、くつしは、悲歎のため力を落すをいふ〇こゝろくるし 心中  
にて苦痛に思ふといふ意、多く、氣の難又、物事の案せらるゝに用ふ、こゝは後のかたなり〇こしら  
へ こしらへは、慰の字の意、いひすかしなだむるなり〇ねや 夜間寝るために設けある座敷、風  
床などのある室なり〇昔の枕 爲家卿の生存中に用ひし枕をいふ〇さながら それながらといふ

辭、其の儼昔の如くにての意○今更、またあらたにといふ意○といふやうに、この處に殘留り置くなり○誰かはらはん、其の塵を誰人の拂ふべきか、誰も拂ひくるゝものはあらざるべしとなり●大恣、己の住居する時でも、斯く甚しく荒廢してある庭垣などなれば、出立の後には、今にもまじり如何様にならんと氣遣はるゝまゝ、自然と眺めやられて悲しさに、己を憂慕する様子なる人等の、涙をこぼすのをも慰め難し、其の中にも、爲相爲守二人の、甚しく力を落したる様子が、氣にかゝる故、種々慰め諭し、それより疑問を見れば、亡夫の枕までも、少かも昔の状と異ならぬを見るにつけても、又別段に悲慕の催されたれば、其の傍に歌を書き記せり、其の歌には、今こゝに殘し置く先人の枕の塵埃のみでも、己の居らぬあては、誰か掃ひくれる人のあるべきか、恐らくはあらざるべし、其の他のことも、亦、斯の如くならんと思はるれば、留守中は心にかゝることのみにて、いと悲しき、悶みたり

代々、書されかれける歌のさうじつもの奥書にて、あだならぬかぎりをもえりしためて、侍従の方へおくるとして、書きをへたるうた

和歌の浦にかきとめたる藻鹽草これを昔のかたみともみよ

あなかしこ横浪かくまはま千鳥ひとかたならぬ跡をおもはし  
これをみて、侍従のかへりごと、いと疾くあり

つひによもあたにはならぬ藻鹽草かたみを三代の跡に残せば

迷はまじ、をじへさりせは濱千鳥ひとかたならぬ跡をそれと●

このかへりごと、いとれとなしければ、心やすくあはれあるにも、昔の人にまかせ奉りたくて、またうちしはたれぬ

よゝに書きなけれける歌のさうじ 俊成定家爲家卿などの、書きて殘し、和歌の草稿等といふ、おかれけるは、置さけるといふを、敬語にいへるなり、さうじは、トナ本にて、巻物の書と墨子といふに對し、もと冊子といひしが、音便にて、シのウに轉ト、さうじとなりたるなりといふ、されば、このは、前に「百千の歌の古反故をも」でありしと同じ物なるべければ、必ずしも、綴ぢたる本をのみふよにはあらずと知るべし○かくがき 其の書の成れるよし、又、傳來のゆゑなどを書き記すこと○あだならぬ あだは、初に註へり、こゝは、實情を籠めたる、又、入用あるべき、なほ、譯すべし○えりしたゝめ 數多の中より選出し仕末をするなり、したゝめとは、何にても亂雑なる者を取片づくるをいふ○書きをへたるうた 書きを、草稿に添へて爲相に遺はし、歌は夫の如しとの意、歌者は阿佛尼なり○和歌の浦 紀伊國海部郡に屬する浦の名、弱浦、若浦、明光浦なども書けり、名の同じさにより歌道の事に用ふ○かきとめたる藻鹽草 書記して殘し留めたる歌の草稿といふ意、藻鹽草とは、鹽を取るため、濱邊にて海潮を漲さかふる海藻をいふ、その海藻は、掻き寄せ集むるもの故、書と物をも藻鹽草といふ、こゝのかきも、掻きとめ書きとの兩用を兼ねたり○かたみ 形見、遺物など書くべし、目前に在らざる人の形として見るべき品物○あなかしこ あなは、あゝ、あはれなごの類にて、歎息の辭、かしこは、想ひごと、故にそゝちそつしていふ感なれど、多くは、決して

てくど、禁止することに用ふ、こゝも然かり○横濱 横の方より打懸くる浪、正しからぬ行爲を、横側より寄する浪に譬へていへるなり○かくなはま千鳥 嶺千鳥よ、かくること勿れといふ意にて、海濱にて、岩に浪をかくる事あれば、爲相を假りに千鳥を見倣して、よめるなり又かくは書をも兼ねたり○ひとかたならぬ跡 尋常ならぬ、一通りならぬ、大切なる筆跡の意、先祖以來、歌道に名譽ある人々の草稿をいふ、さてこのあと、いふことは、千鳥に縁故ある語にて、千鳥は、海邊に、足跡をつくるものなれば、常にかくよむなり、又、文字のこゝを鳥の跡といへば、草稿にも縁ある語なり○かへりごと 使者などの、命令を果たして返りていふ言、こゝは運事なり○つひによも 今ほどもかくも後に至りては必ずいふ意、よもば、今、よもやちやうにはあるまいなといふよもやと同じ○おたにはならじ 無益にはなるまじとなり、じは、行かじ、見じなど、いふじに同じく、後々を推定めていふ辭、さてこの意は、役に立たぬものとはせざらんことを誓ひ居れば、この草稿も空しきものとはなるまじといふにて、空にはせじ、せざればならじと、二段にいふべし、一段に約めていへるものなり○三代のあと 俊成卿より、中、二代を経て、爲相までに傳はれるといふ○のこそば 遣したが故にといふ意、のこしたならばいふには有らず、その時には、のこそばといふべし○まよはまし 迷はむといふに同じく、迷ふかま知れぬとの意、但、まじは、むよりも、其の意の顯かなる所に用ふ○それとも それは、一方ならぬ跡といふを受けたる代へ詞、ちやうの、大切な跡目とも知らずして、迷ふに至るべしと、上に返りて見るべし○まをなしければ 應當に大人らしきなり、まだ十五歳なれど、全く大人の如く、家を大切に思ふ心なまればといふ意○心やすく安心

すること○むかしの人 臣夫爲家卿○しはたれぬ 泣くことなり、もと潮水に海人の衣、袖などの濡るゝをいひしが、轉じてはた泣くに用ふ●大意 代々、書き記されし和歌の草稿等の後に、その由来な書き、益あるべきものみ取纏りて、爲相の方に遺るために、歌を書き添へたり、其の歌、一首は、この書類は、歌のことにつきて、書き遺されし草稿どもなり、されば、この草稿を、父祖の遺物として、大切に取扱ひ、家をも興し名をも揚げよといふ、又一首は、汝爲相よ、吾家は、先祖以來の名家なることを、心に知りてあるならば、よくよく注意して、決して邪の行爲をなすべからず、家聲を損さじと勉め勵めよといふ、爲相は、この消息を見て、忽ち返歌をかくり來たり、其の一は、かく先祖より、代々、力を盡されし歌稿の遺物を、私までに残されましたるによりて、自分も奮勵して、斯の道に盡力すべければ今は碌々たれど、充分成長の後に至らば、家名を揚げこれを無益になすことばあるまじと考ふ、心を安んじ給へといひ、其の二は、母上より、かく懇なる教誡を賜はずは、私は、かゝる名家といふことにも注意せず、徒に年月を過さし、道を踏み迷ふことにてありしならん、されど今は、御教誡に銘じたれば、必、祖先を辱めじ、心を安んじ給へとありたり、この返歌、まことに思慮ありて、小見げならねば、安心もされ、不慮の情も加はるにつきて、故爲家卿に知らせ申したく思へば、例の如く、涙に袖をしぼりたり

大夫の傍さらずなれまづつるを、ふりすてられなん名残、あながちと思ひとりて、手習したるを見れば

はるく〜とゆくと遠く慕はれていかれそなたの空をながめん  
とかきつけたるものより殊にあはれて、おなと紙に書きそへつ  
つくく〜と空ながめを戀ひしくは道とほくとゆとやかへりこん  
とを慰むる

大夫のかたはらららず云々 爲守、常に阿佛尼の傍に在りて、馴れ親めるをいふ、大夫のものは、サ  
といふ意の辭〇よりすてられんなさり 振りは、打見る、搔取るなきいふ打ち搔きに同じく、翻  
へていふ詞、なごりとは、物のやうやく無くならんとて、儘かに残りてあるをいふ、こゝは、別の  
意に用ひたり、今までは、親しかりし阿佛尼に、取殘されやうとする別の悲歎を、爲守の、よく〜  
承知したるよしなり〇あながち 切に、甚しく〇手ならひ 文字の類を書き替ふこと、文字は、手  
してかくものなれば、古よりかくいへり〇はるばると 遙かに、又遙かに、遠くまでもの意、すべて  
重ねいふ時はその意強し〇いかに 如何計、どれ程の意にて、下のながめんといふへ係る副詞〇な  
がめん ながめは、心に憂へ事ある時、長く物を見つゝあるをいふ、今、月花を親るにいふはこと  
なり〇ものよりことに 他の事物より特別にといふ意、中古文には、かゝる副使ひ往々あり、必  
得おくべし〇つくづくと 熟々、よく〜の義、ながめをといふ所へ係ることは〇ながめそ  
ながむること勿れとなり、などとは、相對して禁止の意をゆらはすに用ひらる〇はやかへりこ  
ん 速く、忽ち、阿佛尼の、旅行先より還り來らんとあり〇大意 爲守は、阿佛尼の手近に在り

て、常に親密なりしかば、口々の、都に残るべき別離の悲歎を、切に感じて、其の書ける文字を見れば「母上の行き給は、何處までも暮はるべければ、その位か、行き給ひし方角の空を望み見るこ  
とならん、定めし甚しかるべし、その事、今より知られて、いと悲し」と書したり、この歌、他事より  
も、特別に可哀なる故、同じ紙に、次の如く書き添へたり、それには「わが行きたる方の空を、  
餘り熱心に見て、戀ひしと思ひ、氣をもむ可からず、故もし、吾身を戀ひしと思ふとあらば、都を離  
行先どの道は遠くありとも、忽ちに歸り來べし、故に、餘り悲歎するに及ばず」といひて、爲守を感  
喩したり

山より、侍従の兄の律師も、いでたち見んとて、たはしたり。それも、いと心細く  
と思ひたるを、この手ならひとを見て、又かきそへたり

あたにのみ涙はかけト旅衣心のゆきて立ちかへるほど

とは、こといみじながら、涙のこぼるゝを、荒らかに、ものいひまぎらはすも、ま  
ま〜あはれなるを、阿闍梨の君は、山伏にて、この人々よりは兄なり、この度  
の、道のしるべに送り奉らんとて、出でたゝるめるを、此の手習に、又まどらはさ  
らんやとはとて、書きつく

たちそふぞうれしかりける旅衣かたみに頼む親の守は

山より 山とは、比叡山延曆寺をいふ、叡山は、當時有名なりしかば、山といへば、その事となりしなり、なほ、寺といへば三井寺、祭といへば賀茂祭を指せると一般なり、古歌に「葦の中に出て山は多かれと山とはひえの御山をぞいふ」とあるにも知るべし○侍従の兄の律師 爲相の同母兄源承をいふ、りしは、律師の寮にて、僧の官名、僧官の中、僧正、僧都、律師を三綱といひて、僧尼を統顧する役ありき、釋氏要覽に、解一字名律師、一字者律也とも、具足十法名律師ともいへり、源承、當時叡山の律師なりしかばかくいふ○いでたち見んとておはしたり 阿佛尼の、出立するを見送らんとて、来れりとなり、おはしたりとは、御出でになりたりと、敬ひていへるなり、吾が子にはわれを、僧なりければ、當時の習慣につれて、かく書きしなり○それも それとは、律師源承を指す○あたにのみ たゞ徒につまらなくといふ意○涙はかけじ 涙をば、襟ぎかけまいといふにて、こは未來の打消しにいふ辭○旅衣 旅行の飾着る衣服、上よりの意は、衣を主として、衣に涙を襟ぎかけじといひ、下にかゝる意は、旅行に出立つかたを主として旅行より立還るといふことを知らせたるなり○心のゆきて 心が思ふやうになりて暗れ行くをいふ阿佛尼の所願に勝ちて辭の散するなり○立ちかへるは ほどは問の意、問もなく、事済みて立返るべければその間は悲まじとなり○こといみ 縁起直しをするなり、こといみは、元來、事物を忌慎むことにて、物忌を同じ意なるが、こゝは、口辭にて、凶を言といひ直すことに用ひたり○荒らかものいひやきらすは、悲歎の體を知られまじと、態々首飾を強くし、勇ましく話をせざるなり、まきらすは、すは、暗

かにそれを見知ることを得ざるやう、曖昧ならしむるといふ○さまたあはれなると この一事のみならず、前々より種々の事をも重りて、悲歎せらるゝなり○あざりの君 阿闍梨の君にて、融なり、これも爲家の子、阿闍梨は僧侶の官名、もと梵語の阿闍梨耶といふよりいひ、訛れるもの、支那にては、軌範、又は正行隨など、譯せり○やまふし 山中なごに起臥して佛道を修行し、人のために加持祈禱などするもの、稱、また、この類に野伏といふもあり○道のしるべに いはゆる郷導、男にてもあり、山伏にて常に往復し馴れたればなるべし○たゝるめる めるは、もと見ゆるといふ意の辭にて、多く推量に用ふ、されどこゝは、出立たれたるをなごいふ意なり○まじらばはらむやは やはは、反對の意をあらはす辭、入交りて筆をらすに居るべきか、居るべからずとなく○たちそふ 逆立ち添ふなり、但、たちは、衣といふに縁故のあることば○かたみに頼むおやのまもりは、かたみは、互にといふに同じ、兄弟の子供等互に頼にする母の行く旅には、逆立ち行くがれしと、上へ回らして心得べし○大意 叡山より、爲相の兄源承も、阿佛尼の出立を見送らんとて來られたり、其の人も、甚だ悲しげなる有様にてありしが、かく歌なを書けるを見て、又書き加へたり、其の歌は「たゞ徒らにはかり、旅衣に涙をば襟ぎかけし、母上の鎌倉に行かれて心願を果して歸らるゝは問もなきことなる故にといひ直してはあれど、宿涙の落つるを拂ひ兼ね、荒く物事をいひ紛らはしたるなども、種々を悲しき事なるに、また次の如きこともあり、慶融は山伏なるが、これ等の入等より見れば、兄に當れり、今度の旅行の、難事となりて、送り行かんと出立せらるゝことなるが、又この中に加はるべしとて、歌を書き付け

ぬ、その歌には「相互に顧みにする、親の守護人としては、旅行に遠征に行くが、必うれしくある  
ことである」と讀みたり、これもまた哀なり

女子はあまたもあし。たゞ一人にて、この近きほどの、女院にさぶらひたまふ院のひめ宮、ひと所うまれたまふばかりにて、心づかひも、まことしきさまにて、なとなしくればすれは、宮の御方の戀ひしきも、かねて申し置くついでに、待従大夫などのこと、はぐみればすまよしも、こまかに書きつけて、奥に君をこそ朝日とたのめ故郷に残るなぞして霜にからすか

ときこえたれば、御かへりも、細やかに、いとあはれに書きて、歌のかへしには思ひおく心とゞめは故郷の霜にもかれとやまとなぞしてどぞある

たゞ一人 紀の内侍と呼びし人なり、内侍は、禁中に仕ふる女官の名稱○このちかきほど 阿佛尼の住居せる近傍にましますしなり○女院 龜山天皇の女御、新陽明門院藤原の位子と申す、右大臣基平の女なり、女院とは、御讓位ありし天皇を、太上天皇と申し奉る如く、上皇の后を尊びて申せるにて、何々門院と申す類は、多くこれなり、さて、其の歌に用ひらるゝ門の

は、多くは、其の御住所近くにあるものを採られしあり、又この女院に、（意といふを）加へられしは、前に陽明門院禰子と申すかた、おはしまししによる○さうらひ給ふ 宮仕へをするも、さうらひとは、もと主人の傍に侍して、用事を伺ひつゝあるをいひしされを、轉じては、種々に用ひたり○院のひめ宮 龜山天皇の皇女○ひと所 御一人といふ意、貴人を數ふるには、敬ひて幾所と稱せり○まことしきさま 篤實のさまなるをいふ、かゝる用ひはまのしきは、もて、らしきといふに同じ辭にて、其の様子を推定するに用ひたれど、場合によりては、其の意ならぬもあり○おはすれば 敬ひてはひたれど、紀内侍の上にかゝれり、下の侍従大夫云々の所へ續けて心得べし○宮の御方 皇女の御上なり○かねて申置くついでに かねては、豫め、ついでに、事の便りになり、宮を戀ひしく思ひ奉ることを、出立前に申上げ置く便りにといふ意○はぐみみはす 養育するなり、おはすは、生長せしむること、はぐみむの意は、七頁に注へり○こまかに書きつけて 事柄を詳細に書き記してなり○君をこそ朝日とたのめ 君を、特に旭日の如くに戀み思ふぞといふ意、霜でさうらひつき、内侍を、それを消す朝日にたどへていへるなり○なでしこ 花咲く草の名、體姿でも、撫子とも書き、また常夏ともいふ、かくて、なでしこといふにつきて、歌文の上には、親子の子に准へて用ひたり、こゝも然かり○霜にからすな 霜のためは、枯れしむること勿れとなり、なば禁止の辭、さて爲相兄弟を體姿に准らへ、其の體姿は霜に結るゝものなれば、阿佛尼の去りたる後の、子息の身の上のこと、し、君は、其の霜を消すへき朝日となりて、之を枯らすことなく、よく養育し給へど、冬期の景物を用以て讀めるなり○ときこえたれば いひ遣りたればといふ意、但、まこととは、歌ひ阿

にて申すといはんが如し〇かへし 返歌なり、書状などの返事には多くかへりといひ、歌には多くかへしといふ〇思ひなく云々 かく注意心配し給はゞの意〇大和なでして 羅麥の一種唐菓子に對してかくいふ、今、石竹と稱するものこれなりとぞ●大意 女子は、紀内侍一人のみにて、この邊邊にまします、新陽明門院に仕へ奉れり、其所は近くもあり、且つ皇女一人御誕生ありこのみにて、別なる類もなく、内侍の心ざすも、信實に、志慮もあること故、姫宮を尊び奉る心を、前以て申しやる便次に、爲相爲守等を、世話して給へなすといふことを、委細に書きしるして、其の書の奥に「君をば深く戀み奉る、何とぞ、この所に殘留めおく子等を、養育して給はれ」と、いふ歌を書きて遣はしたれば、この書の返事も、委しく可憐に書きて、右の返歌には「かく御心配なすゝことならば、其の御心のみにても、子息は無事に在らるべし、妾は、別段御注意申すに及ばざるべければ、心安く思はせと書きてありたり

いづつの子息も 五人の子息にて、慶融、源承、紀内侍、爲相、爲守をいふなり〇かつは 片方はいづつ意にて、或る一方より見る時は、思にも思はるべしとあり〇をこかまし をこは、嗚呼と書く、嗚呼の者なをいふをこに同じ、がましは、其の形容といふ辭、無禮がまし、人がましといふ類なり、

いづつの子息も 五人の子息にて、慶融、源承、紀内侍、爲相、爲守をいふなり〇かつは 片方はいづつ意にて、或る一方より見る時は、思にも思はるべしとあり〇をこかまし をこは、嗚呼と書く、嗚呼の者なをいふをこに同じ、がましは、其の形容といふ辭、無禮がまし、人がましといふ類なり、

馬鹿げたる如くにも見ゆべしといふ義〇あはれ 今は悲しき事に多くいへや、昔は心に感ずることとは、何にてもいへり、こゝも感心に思はるゝといふ〇をのみ心弱くては どのみはサウバカリ、前の如くにてのみなり、何時までも愛情にひかれ居てはとなり〇いから 如何にせん、出發もむづかしからん〇つれなくふりすてつ 思ひ切りて、子供たちを跡に残し出立せりとなり、つれなくは、強顔、又は無情なをといふに同じ、つは過去を示す助辭●大意 五人の子息の歌を悉く記したるは、人によりては恐なるが如く思ふもあるべけれど、親の心にては棄つるに忍びざればかくしるせり、さてぐづぐづせば埒明くまじと思切りて出立せりとなり、こゝまでは事の起より出立するに至るまでの事を書けり、以下は旅行中の事なり

あはだぐちこいふ所より、車はかへしつ。ほごなく、逢坂の關こゆるほどに  
さだめなきいのちはしらぬ旅なれど  
またあふ坂ごたのめてぞ行く  
野路といふ所は、こしかたゆくさき人もみえず。日はくれかゝりて、いと物かなしとおもふに、時雨さへうちそゞぐ  
うちこしくれふるさとおもふ袖ぬれて

ゆくさき遠き野路のこの原  
こよひは、鏡といふ所につくべしとさだめつれど、くれはて、ゆきつかず、守山といふ所にこゝまりぬ。こゝにも、時雨、なほしたひきにけり

いさゝなほ袖ぬらせさや宿りけん

まなくしぐれのもる山にしも

けふは、十六日の夜なりけり。いさくるじくつてふしぬ

粟田口 山城國愛宕郡に屬する地○車はかへしつ 都より乗りて來りし牛車をば、この地より返へしたるなり○逢坂の關 近江國滋賀郡にある關所の名、關は塞き止むる意より名づけたるにて、昔、要路に人を置きて、旅人を檢することありしより起れり○いのちはしらぬ旅なれど 生命の安全なるかならざるかは、知り得ぬ旅行にはわれをといふ意○またあふ坂をたのめてぞゆく たのめは頼ましむるにて、彼方より此方を頼みに思はすることなり、この坂の名の如く再び出逢ふこともあらん、また後に逢はんと契りて行き過ぐとなり○野路 近江國粟本郡の地、次の篠原も同じ○くれかゝりて 今いふと同じく、將に暮れんとするなり○いと物かなし 甚だ心細きなり○時雨さへうちそゞろ すでに哀げなる上に、俄雨さへ降り來て、尙更悲しきを添ふとの意、そゝは降りかゝるをいふ○うちしぐれふる郷云々 初の句は、打曇りて雨の降ると故郷をかねていへり、一首の意は、時雨ふりて故郷、都の思はるゝ上に、前途遙かに見渡さるゝ野路の程なれば、ますます悲しく思はるとなり○鏡 近江國野洲郡にある地○くれはて、日の全く入り終はるといふ○守山 上と同郡○時雨なほしたひきにけり 歩むと共に、時雨もヤハリつき深ひ來れりとなり、時雨は、彼方此方降りつゝ廻るもの故、かくはいへり○いといなほ この上にもなほ甚しくの義○とやせりけん といふ意味にて宿したるものなるかとなり○もる山にしも 時雨

の漏ると地名とをかねていへり、一首の意は、今までより尙甚しく袖を濡らしめんために、もるといふ地に宿りたるものか、さても時雨のつれなさをよと打歎きたるなり○十六日の夜なりけり なりけりは、歎息すると説明すると兼ねたる辞なり○これよりは大意をいふこと餘りなくしければ畧したり

いまだ、月のひかりは、かすかに残りたるあけぼのに、もり山をいで、ゆく。やす河わたるほご、さきたちてゆく旅人の、駒のあしのおとばかり、さやかにて、きりいごふかし

たび人はみなもろごもに朝立ちて

こま打ちわたすやすの川霧

十七日の夜は、小野の宿いふ所にござまる。月出でて、山の峯に立ち連きたる松の木の間、けぢめみえて、いごおもしろし。こゝは、夜ふかき霧のまよひに、たごりいでつ

やす河 近江國野洲郡にあり○おとばかりさやかにてきりいごふかし 足音のみは明亮に聞ゆれど、朝霧甚だ多く立ちたれば、姿は見えざるをいふ○たび人は云々 異なる義なし、朝立つは、朝出立つなり、打わたすは、自ら乗りながら馬を渡らしむなり○小野の宿 近江國坂田郡○けぢめ見えていごおもしろし けぢめは差別なり、暗夜ならば、何所も同じ様子なるべけれど、今夜は月影明かなる故、松の樹と樹との間、枝振など見え透きて、種々差別ある風景、甚だ佳なりと



の意○夜ふかき霧のまよひにたどりいでつ 夜半、深く霧たちて、道のまきらはしき程に、出立せりとなり、まよひとは、霧たちて人の迷ふべき程なるをいひ、たどりとは、不分明なるを尋ね求むるをいふ

さめが井さいふ水、夏ならば、うち過ぎまじやとおもふに、かち人は、なほ立寄りてくむめり

むすぶ手ににこる心をすゝぎなば

うき世の夢やさめが井の水

ござおぼゆる。美濃の國、關の藤川わたるほごに、まづおもひつゞけゝる

わが子ども君につかへんためならで

わたらまじやは關の藤川

不破の關屋の板びさしは、今もかはらざりけり

ひまおほき不破の關屋はこのほごの

時雨も月もいかにもるらん

關より、かきくらしつる雨、しぐれに過ぎてふりくらせば、みちもいごあしくて、心より外に、笠縫のむまやこいふ所に、くれはてねごこま

たび人は装うちはらふ夕ぐれの

雨にやごかる笠縫の里

○醒が井 近江國坂田郡にある有名の泉なり○夏ならばうち過ぎまじや もし夏期ならば、徒に通過ぐべきか、必ず立寄りて、この水を酌むべしとなり、過ぎまじやは、過ぎんや過ぎざるべしといふ意にて、今は冬なればかくいへるなり○かち人 徒歩する人○くむめり 酌むヤウナ様子なりと、いさゝか推測りていふなり○むすぶ手 むすぶとは、手に水を酌み入るゝをいふ○にぞる心 佛法にていふ語にて、現世の榮花慾情を遂げんと願ふ心を始、すべてこの世の中の事に觸れて起る心をいふ、穢れたる心といふに同じ○うき世の夢 現世の利慾に迷ふことなり○一首の意は、もしこの清水を手に酌みて、穢れたる心を洗ひ濯ぎしならば、この世の利慾に迷ふはかなき望は、奇麗に無くなることと思はるとなり、醒が井といふにつき、夢といひ、夢といふにつき無くなるを、さむるとはいへるなり○關の藤川 美濃國不破郡にある川の名○おもひつゞけゝる 次の歌の如きことを意中に按じ居たりとなり○ならで にあらずしての意○わたらまじやは 渡ることをせんや渡らざるべしとなり、やはは、反對にうちかへしといふ辭○一首の意は、自分の子息等が、天皇に仕へ奉るべきためにあらずして、妾はこの關の藤川を決して渡るべきか渡らざるべし、今かく都離れて、この關の藤川を渡り辛苦するも全くわが子をして、無事に天皇陛下に奉仕せしめんがためぞとなり、これは古今集に、みのゝ國關の藤川絶えずして君につかへん萬代までといふ歌あれば、その歌をもとゝして、かく詠めるなり○不破の關屋の板びさし 美濃國不破郡に、古關所ありて、三關の一なりと、關屋とは、關を守る番人の居る家をいふ、板びさしは、板にて作りたる軒端の庇なり○今もかはらざりけり この時も、なほ昔と同じく破れ壞れたりの意、こ

れは古歌に、人すまぬ不破の關屋の板びさし、あれにし後はたゞ秋の風とも詠める如く、前方より破れ居る事有名なるが、この時も同じければ、かくいへるなり○ひまおほき　ひまは、板と板との間、即すき間なり○いかにもるらん　如何ばかり甚しく漏ることならんとなり○一首の意は、透間の多くある、この不破の關屋は、この頭では、常にふる時雨も、またすす月も、共にその板間より甚しく多く漏ることならんと、今は漏りてはあらねど、その時を想像していへるなり○關よりかさくらしつる雨　不破の關より、空うち曇りて雨降りたりし故、かくいへり、くらしつるは、雨よりて空の暗くなりしをいふ○しくれに過ぎてよりくらしせば　時雨の様子にも過ぎ越えて終日ふるゆゑにといふ意、時雨は、一時降れども間もなく晴るゝものなれば、時雨より甚しきをかきいへるなり○心より外に　意外に、爲む方なく、已むを得ずなどの意○笠縫の驛　美濃國安八郡にある宿場、驛は、古三十里毎に置かれて、官使の通る時など、馬のつき替へをなしゝものなり○くれはてねど　日は、いまだ全く没し終らねど、即、夜にならねど意○装うちはらふ　装は防雨の具、それを拂ひのけて降りそゞ雨あり○やどかる笠縫の里　笠は、装と共に、雨を防ぐものなれば、笠縫といふ名によりて、宿泊せることをかきいへり、やどかるは、宿所を借りるなり○一首の意は、装を打拂ひそゞ夕ぐれ時の雨に、旅人は、この防雨の具に縁ある笠縫の里にやどるを取りたるが、いとをかきしとなり

十九日、またこゝをいで、ゆく。終夜、降りける雨に、平野とかやいふほど、道いごわろくて、人かよふべくもあらねば、水田の面をぞ、さながらわたりゆく。あづるまんに、雨はふらすなりぬ、ひるつかた、過ぎ行く道に、目にたつ社あり、人にごへば、むすぶの神さきこゆるをいへば  
まもれたらちぎり結ぶの神ならは  
こけぬうらみにわれまよはさで  
すのまたとかやいふ河には、舟をならべて、まさきの綱にやあらん、かけこめたるうき橋あり。いこあやふけれごわたる。この川、つゞみのかたはいこふかくて、かたくは淺ければ  
かたふちの深き心はありながら  
人目つゞみにさぞせかるらん  
かりの世のゆきごみるもはかなしや  
身をうき舟を浮橋にして  
ごぞ、おもひつゞけける。また、一宮といふ社を過ぐて  
一の宮名さへなつかしふたつなく  
みつなき法をまもるなるへし

○平野とかやいふは　平野とか何とかいふ近邊の意、かやは、疑はしきにいふ辭、平野は、安八郡に屬す○人かよふべくもあらねば　人が通行せられさうにもなき故○水田の面をぞさながらわたりゆく　爲むかたなく、水田の上をその儘直に通行したりとなり、さながらは、其のまゝといふ意



考へ奉らるゝ故なりとなり

廿日、尾張の國おりにごといふむまやをゆく。よきぬ道なれば、あつたの宮へまゐりて、硯ごり出て、書きつけて奉るうた

いのるぞよわがおもふことなるみ渦

なるみ渦和歌の浦風へだてずは

みつしほのさしてぞ來つる鳴海渦

雨風も神の心にまかすらん

鳴海の渦を過ぐるに、しほひのほごなれば、さはりなく、ひかたを行くをりし

も濱千鳥、いごおほくさきたちて行くも、しるべ顔なること、ちして

濱千鳥なきてぞさそふ世の中に

すみだ河のわたりにこそありささし、かご都鳥といふごりの、はごごめご赤きは、この浦にもありけり

ここ、はん嘴と足ごはあかざりし

二村山を越えてゆくに、山も野もいと遠くて、日も暮ればてぬ

はるくご二村山を歩き過ぎて

やつはしにごいままらんごいふ、くらきに橋もみえずなりぬ

さゝがにのくもて危き八橋を

夕ぐれかけて渡りぬるかな

○おりと、下戸とかく、中島郡、又下津村ともいふ○よきぬ道、廻り道ならぬをいふ、よくは脇へ枉り入ることなり○熱田の宮、愛知郡熱田にあり、草薙劔を祀り、今熱田神宮と申す○まゐりて、参詣してなり○硯ごり出て、行李より旅硯を取り出だしたること○いのるぞよ、かように祈願致し奉ることでありまするぞといふ意、ぞよは押し強めて注意を起さしむる辭○わがおもふことなるみ渦、阿佛尼の願ふことが成就するやうにとなり、鳴海渦は、地名なれど、なるといふ訓により、成就することに引きかけていへり、さて阿佛尼の思ふこと、は、所領を取返すをいふ○かたひくしは、鳴海渦を、引退く湖といふと、方人即阿佛尼の味方をして、訴に勝つやうにするとの、二意を兼ねていへり○神のまに、神の御意通になるをいふ、即世事は神意に随ひて、いかにもなるもの故、わが願ひを協へさせ給へごの意○一首の意は、神様は、この世の事を自

由にし給ふと承はれば、この度の訴訟につきは、わが味方をし給ひて、わが願望の成就するやうにかへすべしと祈り奉ることとなり、和歌の浦風、歌の道となり、和歌の浦は、紀州海部郡にあること上にいひ、また和歌といふ名より、歌道の事に用ふるよしをすてたし、いふことには、なみ海といひたるに對して、歌道のことを和歌の浦風といへるなり、神も亦、わが願望を成就し給ふことならんは、なり、二首の意は、ここにすし、神が、海を浦との隔てなきが如く、歌道を跋たし給はずは、わが願に同意をせしめて、その望を協へさせ給ふことならんと思はるとなり、○みつしは、大瀧湖なり、○さしてを來つる、阿佛尼の山の地を指して來れるを、潮のさし上(浦)のをいふ、來るに引掛けたり、○みつる、海に渡りて、海中に海松と云ふ、茶の葉の、神が氣の毒を見給ふ目といふとを兼ねていへるなり、○二首の意は、わが身は、この海を越して來れることあるが、何しに來れるかといへば、この神様の御覽になりて、氣の毒なること故、憐れ垂れてやらうと御思はれることと、願みにむしてあるが、何とぞ不慮に思召せとより、○ゆくさき、この後のすべてのこと、主として旅行中のこととあり、○二首の意は、雨や風も、神の御心のまゝに止め給ふことも出来るなるべし、さらば、何とぞ前途に、雨風などの障害なからしめ給へとなり、○鳴海の海は、愛知郡の海濱の地、○はひのは、なれば云々、通行せる時は、丁度退潮のとなりなれば、海水の妨害もなく無事に行かれたるなり、○濱千鳥、濱邊に居る千鳥、○しるべ、顔なること、ちして無心なる千鳥も、己を郷導して行くやうなる心持したる故、次の歌を詠じたり、顔なるは、その様の様子を想像していふなり、○世の中にかと、めん、この世に生存してあるといふ、さて、あと

廿一、千鳥は縁故ある語にて、千鳥は海濱に多く足跡をつくるもの故、歌に多く詠じたり、○はれば上の句の縁にて、かくは、いへり、○二首の意は、われは前方世の中に生存すべしとも思はずありけるを、今まで永らへ居て、ここに來りて見れば、かく千鳥ありて、鳴きつゝ、わが身の道案内をいふられることであるが、なほは、これよりなれば、○すみだ、河、今の東京の隅田川、○わたりの、渡なほ、都鳥、鴨といふ鳥の一名、伊勢物語に、在原業平、ここに來りて、名にしおはらしきこと、いはん、都鳥わがおもふ人はありやなしやと、詠みたるよしを、載せたるが、それより名高くなきたり、○こゝもその文を本として書けるなり、○こと、はん、問ひ尋ねんとの義、このは言なり、○あかさし、他かすあさしにて、満足してありしをいふ、上よりの意は、若と足とが赤く、都鳥といひかけたるなり、○わがすむかたの都鳥、阿佛尼は、都に住居せし故、○二首の意は、其處に居る鳥に、その若と足を赤き色をしたるは、わが住居せし所の名を持てる、都鳥であるかといひ尋ねたとなり、○三村山、參河國碧海郡の山も野も云々、山でも野でも、その道程が、なほに遙かにたて、その上、日も入り終れり、○はる、なほ、遙かに又遙かにあり、○なほすをたせる、なほ野のさきを、おぼつかなくも歩行せりとなり、すは野のはてなり、○夕やみ、夕方の暗きゆを、○二首の意は、二村の山の遙なる道を通越して、その上、夕暮の暗きは、野原の極をやりやうのごとで辛苦して歩み居るとなり、○やつはし、參河國碧海郡の大なる澤ありて、それより流れ出づる小川に、橋を入つ架したる故なりとも、又は板を八枚のけ、その間を杭をうちたる故か、いふともいへり、○と、まらんと、いふ、日暮れたる故、八橋の宿に泊せんと、二行の八のへ

あとなり○さゝがにの 蜘蛛といはんための枕詞なり、蜘蛛は、篠に居て、蟹に似たる者なればいふとも、或は、篠の根は、組合ひたるもの故、篠が根の組といひしが、クモと轉じたるなりともいふ、いづれにてもよろし○くもで、蜘蛛の手を八方に廣げたるありさまなる故、かくいふとも、或は八枚の板の先を十文字に組み合せたる故、組みたる所といふ意にて、かくいへりともいふ○夕ぐれかけて、夕暮のはどとなりての意、さて夕暮といふ事は、蜘蛛に縁のある語なり、そは衣通姫の歌に、わがせが來べき宵なりとがにのくものおこなひこよひしるしもある、この宵即夕暮なればなり、かけるは兼ねると同じ、夕暮に亘りてなほいふに似たり○一首の意は、蜘蛛の手の如く、かけ渡したる危険なる八橋を、夕暮にまでなりて通り過ぎたることである、さても危きこととなり○参考として、こゝに伊勢物語の、都鳥及び八橋の條を擧ぐべし「みかはの國、やうはしといふ所にいたりぬ、そこを、やつ橋といふ事は、水の、くもでにながれわかれて、木やつわたせるによりてなん、やつはしとはいへる、云々、猶ゆきくして、むざしの國と、しもふさの國との中に、いと大なる河あり、それをすみだ川といふ、云々、昔人、ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず、さるをりしも、しろき鳥のはしとあかき、鴨のおほきさなる、水のうへにあそびつゝ、いそぐふ、京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず、わたし守にとひければ、これなん、みやこ鳥といふをさきて、名にしおはば、いざこと、はん都鳥、わが思ふ人はありやなしやと、とよめりければ、船をぞりてなきにけり

廿二日、八橋をいで、行くに、いそよくはれたり。山さほきはら野をわけ行く。

晝つかたになりて、もみじいと多き山にむかひて行く。風につれなき所々、朽葉にそめかへてけり。こきは木ごも、立ちまじりて、あをちの錦をみるこちす。人にこへば、宮路山といふ

しぐれけりそむるちしほのはてはまた

紅葉のにしき色かへるまで

此の山までは、むかじみこちするに、ころさへかはらねば

まちけりな昔もこえしみや路山

おなじくぐれのめぐりあふ世を

山のすそ野に、竹のある所に、萱屋のひこつみゆる。いかにしてなにしたより、かくてすむらんこみゆ

ぬじやたれ山のすそ野に宿しめて

あたりさびこき竹のひこむら

日はいりはて、なほ物のあやめもわかぬほごに、わたうご、かやいふ所にこまりぬ

○いとよくはれたり 空甚だよく晴れ渡りたり○山とほきはら野 廣漠たる原野なり、原野廣ければ、山は自ら遠方なるなり○わけゆく 道路なごもなきやうの所を押し分け通る意○風につれなき所々 つれなきは、平氣なるなり、紅葉ばは、風に散るが常なれど、また一向風に負けず、

枝に葉の附きたる場所場所あるをいふ○うち葉にそめかへてけり。紅色變じて黄はみたる色とな  
 が終れり。なり葉は、朽ちたる葉の色、こゝは眞性の朽葉なり、ぞめかへるは露霜などの色を  
 變せしむるをいふ○とまは木、四季ともに緑葉なる木、松柏の類○青地の錦をみるを、秋葉空  
 への地の地合青くして、紅色の交りたるを青地の錦といふ、直垂などに用ゆ、緑葉と紅葉と交りたる  
 日をいふ、それを見る心持なりなり○宮路山、参河國寶飯郡○あしは、幾度も染めて色の濃くなる  
 をいふ○この歌の意は、霜などの紅色濃く染めなしたる極度は、又さらに紅葉の錦の色が、もど  
 の朽葉の色に立ちかへり復するは、甚しく時雨の雨降りとなり○此の山まではひかしみし  
 こころに、阿佛尼のふたねの記、續古今集などに、父度繁と共に、遠江に來れるよし見ゆ  
 山れば、この邊をも通行せしなり○こころへかはらねば、昔來し時の時候と同じ冬の初めればの意、  
 さへはマデ○まちけりな、待ちて居りたることならんとなり、なほよに似て、推定する歌辭○し  
 ぐれのめどなりむ世を、時雨は、上にもいへる如く、降りつゝ廻るものなれば、まはり合せて、  
 阿佛尼の今日、おるを待ちしならんと上にかへる意なり○二首の意は、むが身の、昔も越え過ぎし  
 宮路山は、昔と同じく時雨の降る時に、われの廻り來て逢ふ時代を、全く待ちつゝありしに、相違  
 なく思はるゝこととなり○山のすそ野、山麓なる野原、すそは、衣の裾にあたる位置にある地  
 方○うがにしてなれたようにかくてすむらんとみゆ、何故に、如何なる事の都合ありありて、か  
 葉りる有様にて住居することならん、不思議と思はるゝ程なりとなり○なほのたは、如何なる  
 便宜のことありてかといふなり、山麓の甚寂びしき一軒屋なる故、都穴の眼より見れば浦かと思は

るゝと當然なるべし○ぬしややれ、主人は何人なるか○宿しめて、住家を設け給へたるをいふ  
 ○すむら、一團むらむらを生ひたる、いはゆる藪をいふ○二首の意は、わの山の麓に家居建て、  
 四邊寂寥たる竹藪のはとりに、起居する者は誰人なるか、さては心細き住居かなとなり○いふは  
 て、なほ、日全や没してその上また○物のあやめ、物の區別、物の條理色目、彼は何これ其を  
 明に見えぬをいふ、あやめは文目とかく○わたうと、寶飯郡度津、ツ轉じてドとなれるなり  
 廿一日のあかつき夜ふかくあり明の影に出で、行く、いつよりも物がなし

住みわびで月の都を出でしが

うき身離れぬありあけのかげ

今宵わたび人のおなじ道にや出でつらん  
 笠打ちきたるあり明の月

たかしの山も越えつ、海みゆるほど、いとおもしろく浦風あれて、松のひびき  
 すぐく浪いきたかこ

袖の湊の浪はやまずて

いとしろき洲崎に、くろき鳥のむれ居たるは、うごいふ鳥なりけり

あら濱に墨の色なるしまつ鳥

ふでも及ば、繪にかきてまし

濱名の橋よりみわたせば、かもめといふ鳥、いとおほく飛びちがひて、水の底へもいる。いはの上にも居たり

かもめ居る洲崎の岩もよそならず

浪のかけこす袖にみなれて

今宵は、ひくまの宿といふころにごまる。此の所のおほかたの名をば、濱松ぞいひし。したしといひしばかりの人々なごも、住む所なり。住み來し人のおもがげも、さまざま思ひ出でられて、又めぐりあひて見つる命のほごも、かへすくあはれなり

濱松のかはらぬかけをたづねきて

みし人なみに昔をぞこふ

その世に見し人の、こむまごなご、よびいでてあひしらふ

○夜ふかく 夜半ごろ、夜の明るるに遠き程○あり明の影 夜明方の月光なり、月は、空にありながら、夜の明るる頃の月を、あり明の月といふ○いつよりも物がなし 常の時よりも何となく悲しとなり、都を出でし時のことなごおもひ出でしなるべし○すみわびて 住むことに困難して住み難くなりて、わふとは、爲むかたなく困り果つるをいふ○月の都 月世界の帝都なり、この國

に替るる如く 彼處にも都ありと、古より思ひしなり、さてこの月の都を出でしかと、いふは、阿佛尼の都を出でたるに、擬へていひたるまでなれば、月といふことは軽く見るべし○うき身 憂愁ある身、阿佛尼を指す○あり明のかけ 在明の月光、さて都を出でても、やはり心配などの絶えぬを、月影の身にそひて離れぬに譬へていへるなり○一首の意は、住むに苦しみて、都を出でて來りしかども、やはり都のことなご忘れ難く、憂愁はわが身に副ひて離るゝことなく、今宵も月影によりて、また悲しき事のみ思ひ出だされぬ、そのさま、恰も月球の人の下界に立さりても、なほその月影の身にそふなごに似たりと思はるとなり○ともなる人 阿佛尼の従者○笠さたり 月の傘りあれば、そのさま笠を被るに似たればかくいへり○たび人のおなじ道にや出つらん云々 旅人と同じく、月も旅行に出でたるものならん、何となれば、この旅人の着る如くに、在明の月も笠を被りたればなりといふ意、たび人ののは、とといふに同じ辭、旅人の出立する同じ道にといふ意なり、さてこの歌は、笠さたりといふについでかくはいへるなり○たかしの山 高師山、三河遠江の間にあり○いとおもしろし 景色の甚だよろしきをいふ○浦風あれて松のひびき すぐ浪いとたかし 浦に吹く風荒く烈しく、松にあたる風の響物凄く、激浪空に響るばかりなりとなり○わがためや浪もたかしの濱ならん 我身ゆゑに、海浪も高く立つことならんといふ義なるを、高師といふ地名にいひかけてかくいへり○袖の溼 筑前國御笠郡にあり、こゝはその地に要用はあらねど、袖といふことをいはんため、海瀬に縁故ある、この溼を讀み込みたるなり○この一首の歌の意は、我は悲歎に堪へずして、常に落涙してのみあれば、袖には浪たつこと休ま





早瀬の小舟竿もやすめず

こよひは、こぼつあふみみつけのこふといふ所にこゝまる。里あれて物おそ

ろし。かたはらに水の井あり

いこゝ旅寐のそらおそろしき

廿四日、ひるになりて、さやの中山こゆ。このまゝこかやいふやしろのほぐもみちいさかりにおもころし。山かけにて、あらしもおよばぬなめり。ふかく入るまんに、をちこちの峯つゞき、ここの山に似ず、心ばそくあはれなり。麓の里に、菊川といふ所にこゝまる

こえくらすふもこの里の夕やみに

松風おくるさやの中山

あかつきおきてみれば、月もいでにけり

雲かゝるさやの中山こえぬこは

みやこに告げよ有明の月

河おごいこすこし

わたらんこ思ひやかけし東路に

ありこばかりはさく河の水

○てんりうのわたり 天龍河の渡、遠江國長下郡にあり○舟にのるに 渡舟に乗るなり○西行がむかしもおもひ出られて云々 西行法師が、昔この所にて、舟より下ろされたることなきが、考へ出だされて、甚だ氣づかひに悲しとなり、西行は、俗稱を佐藤憲清といひ、鳥羽天皇に仕へし士なり、出家して圓位といひしを、後に西行と改め、諸國を遊歴せしは、人のよく知る所なり、さて西行の、天龍河にて、災難に遇ひし話は、西行物語の中に載せたり、曰はく、遠江國天の中川(天龍川の古名のわたりといふ所にて、ものふの乗りたりける船に、便船をしけるに、人多くのりて、船わやふくやありけん、あの法師おりよくといひければ、渡のならひと思ひて、聞入れぬさましてありけるに、情なくむちをもて西行をうちけり、ちなをかしらより出て、よにあへなく見えけれども、西行すこしもうらみたるけしきなくして、手を合せ船よりおりにけり、是を見て、供なりける入道、なきかなしみければ、西行つくくどまもり、都を出でし時、道のあひだにて、いかにも心ぐるしき事あるべしといひしは、これぞかし、たとひ足をさられ命をうしなふとも、それまたくうらみにあらず、もしいにしへの心をもつべくは、髪をそり衣をそめてこそわらめ、云々として、やがて東西へをわかれけるとある、これなり○くみあはせたる舟たゞひとつ 木なごを組合せたる舟、全く一艘のみなりとの義○さしかへるひまもなし 往來の間も、無きまでにいそがしとなり○水のわわのうき世 泡は水に浮ぶもの故、水面に泡の浮べると、憂さこの世どにいひかけて、暗にこの世の水上の泡の如くにはかなきをいへるなり○早瀬の小舟 この天龍川は、流れいと早ければ、早瀬といへるにて、ろこを渡る小舟なり○一首の意は、急流を渡

る小舟の往來するさまを見よ、實に暇なくて半も休めぬはせなり、然して、一度あやまれば、底の蓋船となるべく、甚だ危きことなり、吾人のこの世を渡りゆくありさまも、又この様に想像せらるゝ事なりとなり○とはつゝあふみ 近江の京都に近きに對して、この國を遠江といふ、あふみは、淡海にて湖なり、近江には琵琶湖あり、遠江には濱名湖ありし故、この名あるなり、たゞし濱名湖は、明應年中地震のため元の形を失ひたり○みつけのこふ 見付の國府、遠江國岩田郡にあり、古、國府のありし地なるべし○里あれて物おそろし 此の見付の里は、荒廢して、何となく氣味悪き地なりとなり○かたはらに水の井あり 宿所の傍に、使用せんため水を蓄へたる所ありとなり、井とは、必ずしも深き井戸ならでも、人の使用する水をため置く所をいふ○見つけの里 人を尋ね求むることを、見つけといふ故に、その意と里の名とを引き懸けていへるなり○空おそろしき 何となく、怖くあるをいふ、この空も、旅の空と兩方にいひかけたり○一首の意は、誰人か來りて尋ね求むるといふ里の名と聞く故、たゞでも怖しき旅宿のはせが、益々怖く恐ろしく思はるゝに至れりとなり○さやの中山 遠江國佐野郡にあり○ことまゝとかやいふ社 事任とかいふ神社の義、事任神社は佐野郡にありて、大己貴神を祀る○はせ あたり、近邊○もみぢいとさかりにおもしろし 紅葉の紅色甚だ盛りにて、その風景佳絶なり○山かけにて嵐も及ばぬなり 此處は、山に蔽ひ隠されたる所なる故、嵐の風も、この紅葉にはあたらぬならんとなり、及ばぬは届かぬにて、なめりはなるめりと同じく、であると思ゆるといふ義○ふかくいる せんに 中山の奥深く入るに隨ひて○をちこの峰つゞき 彼方此方遠方の、また近邊の峯の連

きたる所○こと山に似ず心ほそくわはれなり 他所の山とは、その趣を異にし、心細く悲しく思はるゝさましたりとなり○菊川 遠江國榎原郡、中山の東麓にあり○こえくらす 終日山を越ゆるために日を暮らすなり○夕やみ 夕方の薄暗き頃をいふ○一首の意は、終日、山を越えて夕暮に麓の里に來りたるが、あどに松などありて、それに風ふきて響を生じ、己を送る如きさまをなせり、こゝはいづこぞといへば、遠江の佐野の中山ぞとなり○雲かゝるさやの中山 雲の蔽ひかかる佐野の中山、高きをいふなり○ありあけの月 夜明方の月、前にいへり○一首の意は、雲に蔽はれたるはせ、高き遙かなるこの佐野の中山を、われは越え過ぎたりと、有明の月は、都に告げくれよといふ意にて、心なき月をも心ある如く讀みなし、月といふにつき、空なる雲を讀み込みたるなり○河おどいとすむし 菊河の水流の音○思ひやかけし 兼ねてより心に思ひかけたるか、少かも渡るべしと思はざりしとなり、やは、やはの意にて、反對になる辭なり○さく河の水 菊に聞くをひきかけていへり○一首の意は、東海道に在りとのみ聞く、この菊川を、今かく渡るべしと、兼ねてより思設けたりしや、決して思設けざりしことよ、さてゝ人の身は、ささゝくに變化するものよとなり

廿五日、きく、河をいで、今日は大井川といふ河をわたる。水いさあせて、聞きしにはたがひて、わづらひなし。河原いくりこかや、いこはるかなり。水のいでたらんおもかけ、おこはからる

思ひ出づる都のことはおほる河

いくせの石の數も及ばじ

うつ山こゆるほごにしも、あざりの見しりたる山ぶしゆきあひたり。夢にも人をなごむかしをわざと、まねびたらんこちして、いとめづらかに、をかしくもあはれにも、やさしくもおぼゆ。いそぐ道なりといへば、文もあまはえかかず。たゞやむごとなきころひごつにぞ、おこづれ聞こゆる。

わが心うつゝもなこうつの山

夢にもとほき昔こふとて

つたかへでしぐれぬひまもうつの山

泪に袖の色ぞこがる

こよひは、手越といふ所にござまる、なにがしの僧正とかや、のぼりたまふとて、いと人しげし。やさかりかねたりつれごさすがに、人のなき宿もありけり。大井川、遠江と駿河との境にあり○水いとあせて、水の涸れて淺くなるをいふ○聞きしはたがひてわづらひなし。わづらひは、水の困難なり、かねて流水激しければ、渡るに苦難なりと聞きしが、今目前のさまは、それと異なるをいふ○河原いくととかやいとほるかなり。河原は、河岸の廣くて、洪水のはかは、水なき所なきなり、其所が何里とかいひて甚だ遠しとの意○水のでたらんおもかけおしはからる。洪水なきのありたらん時の模様は、この河原の廣さにより、今

より凄じからんと推量せらるるとなり、洪水の時水の來る邊は、常には河原となりてある故、かくいへり、おもかけは、様子なり○都のことはおほる河。都の事は多しと、大井とにかけいへり○この歌は、考に浮ぶ都の事もは、まことに多きことにて、今渡る大井河の數知れぬ流にある、石の數は多けれど、とてもわが思ふ事には過ぐることをあるまじといふ意、瀬は河の流れなり○うつの山。駿河有度郡○はごにしも。時に丁度の意○あざりの見しりたる山ぶしゆきあひたり。阿闍梨の知己の山伏と出逢ひたりとなり、この阿闍梨は、すでに前に見えし塵融なり○夢にも人をなご昔をわざとまねびたらん心ちして。こゝは、伊勢物語に「行きくつて駿河國に到りぬ、うつの山にいたりて、わが入らんとする道は、いとくらうほそきに、葛根は繁り、物心細く、すゝるなるめをみることを思ふに、修行者あひたり、かゝる道は、いかでかいまするといふを見れば、みし人なりけり、京にその人の御もどにて、文かきてつく「駿河なるうつの山べのうつゝにも夢にも人のあはぬなりけり」と、あるによりて書けり、文の意は、夢にも人のなごを讀みし、昔の伊勢物語のさまを、態々真似たる如き、心持がするとなり、人をは、恐くは人のの誤ならん○いとめづらかにをかしくもあはれにもやさしくもおぼゆ。實に奇遇にもあり、或は面白くも、又は悲しくも、又は閑雅なる趣にも思はるといふ意、めづらかは、物事の稀なるなり、やさしきは、雅致あると殊勝あるとを合せたる如き意なり○いそぐ道なりといへば文もあまはえかかず。かの山伏は、急ぐ旅行なりといふ故、手紙も多くは書き得ずとなり、山伏は、都へ上る人ゆゑ、それに手紙を托せんとせしかど、急ぎ故多くの人々には、書き送る暇なきなり○たゞやむごとなき所

ひとつにぞおとづれきこゆる 他は打措きて、たゞ貴き御方御一人のみに消息を奉りたりとなり、  
 やむことなきは、この上なしといふ意、こゝは貴きをいふ、きこゆるは、申上ぐるといふは色の  
 ことなり○わが心うつゝともなし 自分の心は、確かにもなきほをなりとなり、うつゝは、後世  
 にては、物の判然せぬことにいへど、昔は心の知覚の確實なるをうつゝといへり、こゝもうつゝの意  
 なり、さてうつゝは、うつゝの山に縁故ある詞なり○夢にも 夢の中にてもといふ意にて、常に都  
 のことを思ふをいへり、たゞし夢は、醒めたる時をうつゝといふ故、こゝに縁故ある詞なり○  
 首の意は、今わが身は、うつゝの山にありて、夢の中までも、甚だしく、遠き昔、都にありし時  
 のことを戀ひ慕ひ居るため、心の中は、殆んど茫然として、本心を失ふほをにてありとなり○つた  
 かへでしぐれぬひま 葛や楓などの時雨に濡れぬ時ともいふ意にて、葛楓は、時雨に遇ひて色の  
 紅になるもの故、下に色ぞこがるゝといふことをいはんとて、まづかくいへり○色ぞこがるゝ  
 こがるゝは、焼け焦げることなり、こゝは甚しく袖に涙のかゝる故、火に焼けて色の赤黒くなる  
 ほをになりたりとて、悲の強さを表したるなり○一首の意は、うつゝの山なる葛楓は、時雨により  
 紅色の濃くなることなるが、その然らざる時でも、われは常に、都を忍ぶ悲歎の涙甚しき故に、  
 袖の色も、赤黒く焦げるばかりになりて、恰もこの山の葛楓の強き時雨にあひたるが如しとなり  
 ○手越 駿河國阿部川のはとり○なにがしの僧正 何某とかいふ僧なり、姓名詳ならず、僧正は  
 僧官にて、正は政の意なり、佛道の政令を敷きて、よく自他を正す僧なる故、かくいへるなり○  
 のほりたまふ 京都を指して上り行なり、僧なる故、尊みて給ふといへり○さすがに しかす

にシレデモヤハリの意

廿六日、わらしな河さかやわたりて、息津の濱にうちいつ、なくく出でしあ  
 ここの月かけなご、まづおもひ出でらる。ひる立ち入りたる所に、あやしき黄楊  
 の小枕あり。いこくるしければうちふしたるに、硯もみゆれば、まくらのしや  
 うじに、ふしながら書きつけつ

なほざりにみるめばかりをかり枕

むすびおきつこ人にかたるな

くれかゝるほご、清見が關を過ぐ。岩こそ浪の、しろききぬを打ちさするやう  
 にみゆる、いごをかじ

清見潟年ふる岩にこごゝはん

浪のぬれ衣いくかさねきつ

ほごなく暮れて、そのわたりの海ちかきさごにこごまりぬ。浦人のあわざに  
 や、こなりよりくゆりかかると煙、いごむつかしきにほひなれば、夜のやかごな  
 まぐさしごいひける、人のこごばも思ひ出でらる。よもすがら、風いごあれて、  
 浪たゝ枕の上にしたちさわぐ

ならはずよよそにききこし清見潟

荒磯なみのかゝるねざめは

○わらしな河 駿河國駿河郡薬科川○息津の濱 奥津とも沖津とも書けり、駿河國庶原郡○なくく出でし云々 これは新古今集なる定家卿の、こととへよおもひおきつのはまらとり、なくくいでしあとの月かげといふ歌をさせるなり、それは、都に殘置きし人を思ひて、折節は旅癡の憂さを言問へよといふ意にて、讀まれたるにて、其のありさま、今の場合によく似たる上、この地名をさへ讀み込まれたれば、まづ第一に思ひ出でられたりとなり、なほ右の歌の意をいはば、今われ奥津の濱にあるが、泣きながら思をのこして別れて出で來し跡の方の月影よ、わがこの安否を訪問へよといふにて、人を月に擬へていへり、その他は、たゞなくくの縁にて置きたるなり○あやしき黄楊の小枕あり 粗末なる黄楊の木にて作りたる枕ありとなり、あやしきは、見馴れざる賤しきものに、そへていふ詞なり、例へば、あやしき賤、あやしき男などの如し、小枕は、假字にて、木枕あるべし○硯もみゆれば 硯も目前にあればといふ義○まくらの障子にふしながら書きつけつ 枕邊に近き襖に、臥したるまゝにて、次の歌をば書きつけたりとなり、障子は、今いふからかみ屏風の類なり○なほざりに カソツメニ、又はイタツラニなどいふに同じ○みるめばかり 見る目と海松藻とを兼ねていへり、海松は、ウミマツともいひて、松の木振に似たる海藻なり○かり枕 刈りと假りとかけていへり○むすびおきつと 深く契を結び置きたりといふ意と、地名の奥津とに、かけていへるなり○人にかたるな 他人に話すこと勿れとなり、奥津といふにつき、戯れによめるなり○一首の意は、一寸と夢を見ん即ち眠らんとために、枕を假りしのみなれば、思ひ違へて、この枕と深き契をこめしなとと、人に談ることなかれとな

り、みるめ、かり枕、むすびなど、皆縁語によりて、いへるなり○清見が關 これまた庶原郡○岩こす浪の云々 海岸なる岩を越す浪が、宛も白き衣を岩に着するが如くに見ゆる事なるが、其の景色、甚だ面白しとなり○年ふる岩 年數を経たる岩といふ義と、舊き岩といふ義とを兼ねたり○ぬれぎぬ 濡れたる衣服、冤罪を蒙るをいふ○一首の意は、清見海の、舊き岩に尋ねん、今見かけたる所にては、衣の如き浪の打寄ること絶えざるが、かく誠ならぬ浪の衣をば、幾千萬の數をかさね來たることか、問はまほしきことなりとなり○そのわたり わたりは、あたりと同じ、清見が關の近邊といふ義○浦人のしわざにや しわざは所業なり、この浦に住める人の、爲すことなるかといふ意にて、ニヤの下に、アランといふ辭を省きたるなり○くゆりかゝるくすぶり來るをいふ、燕の字を書けり、燒物、蚊遣火などの煙に用ふ○むつかしきにはひ 甚だむさくるしく、心持悪き臭なり、むつかしとは、すべて物事の煩はしく、うるさく厭はしきなどをいふ○夜のやかさをなまぐさしといひける人のことば やかさは、家の門にて、旅宿を指す、なまぐさは、魚などの生々しき臭なり、さてこれをいひし人は、唐の白居易(字は樂天)なり、白氏文集三に、朝飢飢餓費杯盤夜宿腥臊汚牀席とある、この詞を探れるなり○思ひ出でらる 今この旅宿に、悪しき臭する煙の來るをかきては、白氏文集にいへる右の事ども考へ出ださるとなり○浪たゞ枕の上にたちざわぐ 波濤たゞ全く、わが枕邊にて立ちざわぎ打寄せたりとなり、これは家が海近ければ、恰も浪の、枕近くまでも寄せ來る如き心ちする故、實際寄せ來るにもわらざるべけれど、事のさまを甚しくいへるなり○ならはずよ 馴れて居らぬこととなり、ならふと

は、其の事の経験あるをいふ〇よそにきこし 他の脇の事に聞きて來たりし、他處事と思ひしといふ意〇かゝるねざめは 浪の寄せかゝると、斯の如くあるとの二つに、いひかけたり〇この歌は、今まで話なきにのみ聞き居りし清見海、荒き磯の浪の、かくばかり立騒ぎ、さうくくじく、夢も結ばず聞き居ることには、出會ひもせず、不馴なれば、誠に意外にて、心細く悲しいふ意なり、ねざめは、癡覺をかきて、目のさむること

富士の山を見れば、煙もたゞすむかし、父の朝臣にさそはれて、いかになるみの浦なればなご、よみしころ、ごほつあふみの國まではみしかば、富士のけふりのするも、あさゆふたしかにみえしものを、いつの年よりかたえしごこへば、さだかに答ふる人だになし

たが方になびきはて、か富士のねの

煙の末のみえずなるらん

古今の序のこごばまで、おもひ出られて

いつの世のふもこの塵かふじの嶺を

雪さへ高き山となしけん

朽ちはてしながらのほしをつくらばや

富士の煙もたゞすなりなば

今宵は、なみのうへこいふ所にやどりて、あれたるおこさらにも目もあはず

父の朝臣 阿佛尼の後の親、平の度繁といふ人なり〇いかになるみの浦なれば この歌は、續古今和歌集にありて、其の詞書に、おもふこと侍りけるころ、父平の度繁朝臣と、とはたうみの國にまかりけるに、心ならずともなひて、なるみの浦をすぐとて、よみ侍りける。さてもわれいかになるみの浦なればおもふかたにはどほさがるらん」としるせり、この歌の意は、さてく我身はいかになりゆくわけにて、かく願ふ方角には、遠く離ることならん、甚だ氣づかはしきことなりとなり〇とはつあふみの國まではみしかば 遠江國迄は來りしなり、近江をちかつあふみといふに對し、濱名の湖あることを、都より遠き湖の意にてかくいへり〇富士のけふりのするも富士山より起る火煙の棚引ける所をいふ、末は煙のさきなり〇朝夕たしかにみえしものを 常に明に見えたりしにといふ義〇いつの年よりかたえしとへばさだかにこたふる人だになし 昔は煙の起ちしが、今は見えぬ故、この地の人々に、富士の煙は何といふ年から絶果てしものかと、問ひ尋ねるに、確かに返答をする者だけでもなしといふ意にて、この地の人は、氣にも留めぬ如きをいふ、年よりかのかは、たえしの下に置きて見るべし、たえしかといふ義なり〇なびきはて、か 靡き切りてしまひてかといふ義にて、全く片方に依り果つるなり、通常靡くといふは、女の男に従がふをいへば、こゝも煙を人になぞらへて、誰か方にとはいへるなり〇一首の意は、さういふ者の方に依り果て、かく富士の嶺より立つ煙の、全く跡方もなくなりて、仕まつたのであらうか、さても不思議のこととなり〇古今の序のこごばまでおもひ出られて これは、古今和歌集の序に、遠き所も、出發つ足元よりはじまりて、年月をわたり、高き山も、ふもとのちりひ

ちよりなりて、天雲たなびくまで、おひのぼれる如くどある、高き山も云々の詞の、考へ出だされしとなり、古今の序は、紀貫之の作なり○雪さへ高き山 雪までも、積りて高き山といふ義○一首の意は、塵も積りて高き山となるよし、古今の序に見えたるが、然らば、何時代頃の山麓の塵か、つもりくして、富士山を、上に雪までも添へ積れる程の、高山とならしめたのであらう、さても昔の忍ばるゝこととなり○長柄のはしをつくらばや いでや、長柄橋を新に造らんと欲すとなり、長柄橋は、攝津國西成郡に在りき、さてこの歌も、古今集の序に「今はふじの山も煙たゝすなり、ながらのはしもつくるなりとさく人は、歌にのみぞ心をなくさめける」とある、詞をとりて書けり、又同書俳諧の部に、伊勢の詠める歌に、難波なる長柄のはしも造るなり、今はわが身を何にたどへん、といふあり、右の序は、これによりて書けるなり、かくいふ故は、長柄の橋は、常に朽ちてありて、容易に新造することなければ、これを新造するは、甚だ稀しきなり、古今の序も、その意にて、富士山の煙の絶えしも、この橋をつくるも、共に稀しきをいへるなり、この詞ある故に、今阿佛尼も、其れを採りて詠みたり、ばやは、希望する意なり○一首の意は、全く朽廢してましまひたる、攝津の長柄川の橋をも、いでや造らんと欲す、昔より相對していひたる、富士山の煙も、かく立たすなりし上からは、といふにて、上の造らばやといふ所に、かへして見るべし、さてこの歌に、なりなばといへること、格に違へるが如し、その故は、なりなばは、もしなりたるならばと、未だ然かならぬ事を、前よりいふことなり、然るに、實際こゝにては、富士山の煙は、立たすにあるなり、さればかくいひては、秘かすらず覺ゆ、故に今はなればナ

リタル故)の意にて解釋せり、なほ識者の教をまつ○浪の上 地名なれを詳ならず、藤原郡の邊なるべしと殘月抄にいへり○あれたるおと云々 浪の立騒ぎ、海の荒るゝ音烈しくて、少かも眠られずとなり  
廿七日、明はなれて後、ふじ河わたる。朝川いささむし。かぞふれば、十五瀬をぞわたりぬる

さえわびぬ雪よりおろす富士河の

川風こほる冬の衣手

今日は、日いこうらゝかにて、田子の浦にうちいづ。あまごものいさりするを  
見ても

心からおりたつたこの蟹衣

ほさぬうらみご人にかたるな

こぞいはまほしき。伊豆の國府といふ所にこゝまる。いまだ、夕日のこるほど、三島の明神へまあるとて、よみてたてまつる

あはれこやみしまの神の宮柱

たゞこゝにしもめぐりきにけり

おのづから傳へし跡もあるものを  
神はしるらん敷島のみち



たづねきてわがこえかゝる筈根路を

山のかひあるまゝるへこそ思ふ

○明はなれて後 夜の全く明け果てし後○富士河 富士の麓を流るゝ有名なる河○朝川いとさむし 朝時の川を朝川といふ、今朝の間に渡る富士河の風など、甚だ寒く覺ゆとなり○かぞふれば十五瀬をぞわたりぬる 此處を渡りて、都より過來し川を數ふれば、十五の多きに及べりとなり、瀬とは、淵に對して、河中の小高く水あさき所をいふなり、轉じては、たゞ川の事にも使へり○さえわびぬ さえは、身にしみるはさき寒きなり、わびは困り果つること、こゝは川風の寒きにより、甚だ困り入りたるをいふ○おろす 吹き下すなり、富士山の雪の積れる所より、吹き下しくる川風とつゞく意なり○衣手 衣服の手にわたる所、袖をいふ、またたゞ衣服をいふ○一首の意は、富士の雪より吹き来る富士河の河風が、凍るはさき寒ければ、衣の袖も甚だ冷えはてたりとなり、かくいひて、わが身の甚だ寒きを知らせたるなり○うちらゝか のさかといふが如し、魔はしく附れて穩なるなり○田子の浦にうちらゝか これは、万葉なる、赤人の、田兒の浦ゆ打出てみればましろにぞ、ふじのたかねに雪はふりける、と詠めるを思ひて書けるなるべし、この浦、古のは鷹原郡と思はれるを、こゝにいへるは、富士郡と覺ゆ、うちらゝかは、さし出でたりといふ意にて、この詞にて、いかにも廣き地に出でたるありさま、おしはからる○あまをものいさするを見ても いさりは、海邊にて漁獵をすることなり、漁人などの魚を捕る所を見るにつけても、次の如くいひたしとなり○心からおりたつ 自分の心より、難を岸より海中にすり入るといふ意、必

からは、必よりといふが如し、下に衣といふ語あれば、おりに織の意をも持たせたるなるべし○たを 田子に、浦の名をかけたなり、田子とは、田の中に入りて、稻の苗などを植うる、いはゆる農夫なり、こゝは漁夫にて農をもするものをいふ○蓑衣 は海人の着る衣服なり○一首の意は、わが心より田兒の浦の海人は、水中に入ること故、たどへその海人の衣が常に濡れたりとも、永久盡くことなき遺恨であると、人に話すことなかなざ、いひたきことであるとなり、こゝは阿佛尼、わが身土地を奪はれし恨ありて、袖の干ることなれば、この浦にて漁夫等の濡れつゝ、漁業をするを見て、詞を綾なして、その意を詠めるなり○いはまはしき はいひたき事であると希望の詞なり○伊豆の國府 同國田方郡、昔、國府のありし所故にこの名あり○いまだ日のこるはさ大陽の全く入り果てぬ頃なり○三島の明神 伊豆國賀茂郡にましまし大山祇神を祭る○あはれとやみしまの神 憐れの事と見給ふらんといふを、三島といふにかけたること、例の如し、なほいは、我身上を不慮と見給ふかも知らずとて、こゝに來れりとなり○一首の意は、我身上を不慮と見給ふこともあらんかどて、たゞ一心になりて、この三島の神の御前に拜禮しに來りたりとなり、宮柱は、神社の柱なり、これはめぐるといふ語に縁あることにて、古事記日本紀に、伊那那岐伊那那美の二神、柱を廻りて夫婦の契をなし給ひし事を載せたるが、それによれるなり○敷島のみち 歌道のことなり、上にいへり○この歌の意は、爲家が、和歌道を傳へたるは、もとより判然としたるものなることを、神は御承知あらせらるゝことなるべし、されば、よし横領せられぬども、必ず怒と思召して、わが願を叶へ給ふべしとなり○筈根路 相摸に屬す○山のかひある

しるべ云々 かしは、峽の字を書きて、山と山との間をいふ、即、險じき溪谷なり、さてか  
ひあるは、其の事をなしたるだけの功益あることにて、阿佛尼の、京都より熊ヶ、關東の方まで來  
りし効能の見ゆべき階梯なるべしと思へりとなり○一首の意は、わが尋ね來て、今越えかゝる筈  
根の山坂を、願の叶ふべき道なるべ、前兆ぞと心得、喜ばしく吉兆を祈り居りといふなり  
廿八日、伊豆のこふをいで、はこねぢにかゝる。いまだ、夜ぶかかりければ

たましくしげはこねのやまをいそげごも

なほ明がたき横雲のそら

あしから山は道遠しとて、箱根路にかゝるなりけり

ゆかしさよそなたの雲をそばだて、

よそになしぬる足柄のやま

いささかしき山をくだる。人のあしもとにまゝりがたし。湯坂こそいふなる。か  
らうしてこえはてたれば、またふもごに、はやかほといふ河あり。まごごには  
やし。木のおほく流るゝを、いかにごごへば、あまのもしほ木をうらへいださ  
んごて、ながすなりといふ

あづまぢのゆさかをこえて見たせば

しほ木ながるゝはや河の水

湯坂より浦にいで、日くれかゝるに、ごまるべき所さほし。伊豆の大島まで

見わたさるゝ海づらを、いつごごかいふごごへご、しりたる人もなし。あまの  
家のみぞある

あまのすむその里の名もしら涙の

よする渚に宿やからまし

まりごがはといふ河を、いごくらくてたごりわたる。こよひは、さかほといふ  
所にごごまる。明日は、鎌倉へいるべしといふなり

はこねぢにかゝる 箱根の山路にさしかゝるなり○たまくしけ 櫛を入るる爲の筈にて玉なをを

飾とせるものなり、それは箱なる故、箱といふことの枕詞としたるなり○横雲の空 東の空に夜

明け近くは、雲の横はり棚引くことあり、これを横雲の空といふ、されば、東の空なをいふに同

じ○この歌は異なることなし、箱は開くるものなれば、明けがたさといふは縁語なり○足柄山

これも相摸なり○かゝるなりけり さしかゝり行くわけであるといふ義○ゆかしさよ 奥ゆかし

く慕はしき事よとなり○そばたて、 境し隔て傾ぐるをいふ○あし柄の山 山の名に悪しといふ

意をかけていへり○一首の意は、あちらの方の雲を、險しく隔て、悪しきものをよそくしく

なし果てたる、足柄の山の、さても奥ゆかしきことよ、世は多く悪人に組して、善人を隔つるこ

どなるになをいふ意なり○さかしき山 險阻の山○人のあしもとにまゝり難し 餘り急に險阻にて

通行人の、立止ることも叶はず、すべり落つる程なり○湯坂 箱根湯本の坂なること、残月抄にい

へる如し○からうじて 辛くして、やうやくして○まごごにはやし 其の名を早河といふに違は

で急流なりとなり○いかにとへば 何故、如何にしてかく木を流すのであるかと問へばといふ意、いかにの下にするぞなほの辭を入れて見るべし○あまのもしは木 もしは木は、潮を煮るための新なり、海邊にて鹽をとるに、海藻を刈集めて、それに潮を汲みかけて日にはしたるを、簀の上に積みねき、又更に潮を汲みかけてたる、故に、もしはといふなり、それを釜に入れて煮る時の薪を、もしは木といふ、此處の海人等が、其の薪を浦へいださんとて、流すなりと答へたりとの意○あづまぎの云々 此の歌聞えたるが如し○浦にいでて 此は早河の浦といへる邊なるべし○伊豆の大島 今いふ所に同じ○海づら 海のうちへ、海面○その里の名もしら浪の 白浪と名をも知らぬといふといひかけたるなり○一首の意、名も何も知れぬ、浪うち寄せて淋しき海邊の、海人の住む家なきに、宿泊をせん、はかに家も無ければとなり○まりこ川 九子川、鞠子川、いづれをも書けり○たどりわたる おぼつかなく、尋ねくして渡れりとなり○さかは 酒匂と書す驛なり○鎌倉 相模國、今もいふ鎌倉なり、この名の起は、詞林采要抄に、藤原鎌足、この地に來りて、鎌を埋めけるより、鎌を埋むる倉といふ意より出でたりとせり、又殘月抄には、峽間谷の、を省きていへるなるべしといへり

廿九日、さかはをいでて、はまぢをはるくこゆく。あけはなる、海づらを、いこほそき月いでたり

浦路ゆく心ほそさを浪間より  
出で、しらするあり明の月

なぎさによせかへる浪のうへに、霧たちて、あまたありつるつり舟、見えすなりぬ

あまをぶねこぎ行く方を見せじこや  
浪に立ちそふ浦の朝霧  
みやことほくへだよりはてぬるも、なほ夢のこゝちとして  
たちはなれよもうき浪はかけもせじ

○浪ぢをはるくといふ、海に沿へる路を、遙かに進み行くなり○あけはなる、海づらといふはそき月いでたり 夜漸く明け行く海面より、甚だ細き月出でたりとなり、海づらは、海の面、浪の上なり、ヲは今の語にてヨリといふに同じ○心ほそさ 哀に悲しきをいふ、ほそさに、月の細きをも兼ねたり○一首の意は、海邊を通り行く哀さ加減を、夜明がたの月が、浪と浪との間より出でて、覺り知らずることである、さても悲しきことといふにて、月の形細きゆゑ、その月の細さは心細しといひ、やがて月影を見て悲しく思はるゝとを詠めるなり○渚によせかへる 海岸に打寄せては、又沖に立歸るをよせかへるといふ○あまをぶね 海人の乗りたる小き舟○見せじこや 人に見せまいといふ意、なるらんと意、この歌は、ことなる意なし○なほ夢のこゝちとして やはりなほ、夢中の如き心持ちにて、恍惚として確にこゝに來れりとも知らず、都の事のみ思ひ出でらるとなり○むかしの人の 亡夫爲家卿を指せるなり、人のは、人の生存せし時と

同じ世といふ意なり○一首の意は、亡夫爲家卿の、まだこの世にいませしならば、いかでかく都を立離れ、遠く隔り来て、よもや子供等に、憂き目辛き目を見せざるべきに、今は彼の人もまじきさねば、潮も起り、かく遠き境にも来り、子供等にも辛勞さすることよ、さても昔の人のまじきさねこそ、返すくも悲しけれといふ意なりうき浪といひ、かけといふは、縁語にて、憂きことに遣はするをいふ

あづまにて住む所は、月影のやつこぞいふなる。浦ちかき山もこにて、風いこあらし。山寺のかたはらなれば、のどかにすこくて、浪のおこ、松の風、たえず。みやこのおこづれ、いつしかにおほつかなきほどにしも、うつ山にてゆきあひたりし、やまぶしのたよりにこごづけまうしたりし人の御もさより、たしかなるたよりにつけて、ありし御返しにおほしくて

たび衣泪をそへてうつ山

こぐれぬひまもさをこぐるらん

ゆくりなくあくがれ出でこいさよひの

月やおくれぬかたみなるべき

都を出でしことは、神無月十六日なりしかば、いさよふ月を、おぼしめしわすれざりけるにや、いこやましく、あはれにて、たゞこの御返事はかりをそまたきいゆる

めぐりあふするをぞたのむゆくりなく

空にうかれこいさよひの月

○あづまにて あづまとは、東國を一體にいふ名なれど、こゝは鎌倉をいふ○月影の谷 極樂寺の境内なり○とぞいふなる といふ所であります、強たしかにいひたるなり○浦近き云々 山もとは山の麓なり、海邊の山下なれば、風の強くわたる所なりとなり○山寺 極樂寺をいふ○のどかにすこくて 閑かに怖しげにあるなり、元來のどかは、ものやはらかに閑靜なるをいふ詞なれば、こゝにはあはぬが如し、こゝはたゞ人などの多くこぬ、町なせに遠きを顯はさんとして、いへるなるべし○みやこのおこづれ 京都の人よりの消息、音信○いつしかにおほつかなきほどにしも いつ来るか〜と待たれて、心許なく氣遣ひなるをりしも、丁度といふ意なり、いつしかは、いつか〜と、物の待たるゝなり、おほつかなきは、物事の明かならずして、心配になるなり○うつ山 前に出でたり、駿河國なり○やまぶしのたよりにこごづけまうしたりし人の御許より この事實は、すでに上に出でたり、たよりは、便宜、ついでなせに同じ、こごづけは托するなり○たしかなるたよりにつけて 確實なる好便に托して、御返事ありたりとなり○ありし御返しとおぼしくて ありしは、前にありしの意にて、以前のといふに同じ、そのをり奉りし歌の御返歌と思はれて、左の歌を送り給へりとなり○たび衣云々 一首の意は、あなたの旅衣は、悲しみの泪もそへる故に、うつ山の時雨、降らぬをりも、さやうに、多く濡れまざることと想像して居りますまことにつらくあはるゝことなるべし○ゆくりなく 前かたから定まりたるに

らで、不圖何事かの起るをいふ、不意にの義○おくがれ出でし、心も心ならず、落ちつかず、浮き立つをいふ、心配のおまじりごまじりひ出でしといふ意○おくれぬかたみ、身を離れぬ紀念物の義、通常死ぬ時に後へのこすものを、かたみといふにつき、この月はたい都にて見らるゝだけが、阿佛尼のかたみにて、やはり阿佛尼の身にそひたれば、人の、後に遺したるかたみにはあらぬよしを讀めるなり○一首の意は、不意に都をさまよひ出でし時の、十六夜の月が、あなたに離れずつきとひ居る所の紀念物として、見るべき物の如くある、されば、今は、この月を見て、君とおもひ、わが心を慰め居りとなり○いざよふ月を云々、いざよふ月は、始にいへり、おぼしめし忘れずとは、常に心にかへ居て遺忘せぬをいふ、けるにやの下にあらんといふ詞を加へて見るべし○いとやさしくおはれにて、甚だ殊勝にも可憐にも、思はれてといふ意○たい此の御返事ばかりをぞまたさこゆる、餘事はさし措き、たいこの歌の御返歌のみを、更に上ぐとなり○めぐりあふ云云、一首の意は、かく、都より旅立ち出で來しわれも、今はたい、再び都にかへりて、逢ひ見ん後々の事を頼みにし、一向其のりを待ちてありとなり、前の歌にも、月のことある故、今はわが身を月になしていへり、されば、不意に空に浮かれ出でしといふは、おもに月のことにいへるなり、めぐりあふも、また月に縁ある語なり

さきのうひやうゑのかみの御むすめ、歌よむ人にて、勅選にも、たび／＼いりたまへり、大宮院の權中納言さきこゆる人、歌の事ゆゑ、朝夕まうしなれしかばにや、道のほごのおぼつかなさなど、おこづれたまへる文に

はる／＼さおもひこそやれたび衣

なみだしぐるゝほごやいかにか

かへり事に

おもひやれ露も時雨もひこつにて

山路わけこし袖のしづくを

このせうこのためかぬのさきも、おなじさまに、おぼつかなさなどかきて

古郷は時雨にたちしたび衣

雪にやいさゝさえまさるらん

返し

たび衣浦風さえて神無月

しぐるゝ空にゆきぞふりそふ

○ささのうひやうゑのかみの御むすめ、前に右兵衛督たりし人の娘なり、右兵衛督は、爲家の弟にて、其の娘は爲子といふ人なり○勅選にもたび／＼いりたまへり、勅選の歌集の中にも、詠める歌幾度も入りたりとなり、勅選とは、勅命によりて選ぶ歌集をいふ○大宮院の權中納言とさきゆ、大宮院は、後嵯峨天皇の后にて、藤原嫡子といふ御方なり、太政大臣實氏の女、さてその爲子は、この院に仕へたる故、大宮院の權中納言と稱し居るよしなり、權中納言は、人々の呼ぶ名にて、例へば、紫式部、清少納言などいふに同じ○歌の事ゆゑ朝夕まうしなれしかばにや、阿佛

厄と爲子とは、歌道の事につきて、常に親しく交りたるからにてもあらんかといふ意にて、それ故、次の如く音信ありたりとつゞくなり、まうしなれしとは、いひ馴れたると同じく、互に隔てなく、物事をいひかはせるをいふ、にやの下に、あらんといふを含めり○道のほどのおぼつかなさなどおとづれたまへる文に、道中間の、氣遣に思はるゝよしなどを訪ひ尋ね給へる文の中に、次の歌をかゝれたりとなり○はるゝと云々一首の意は、旅路のものうさに、着たる衣に泪のそゞきて、時雨の如くなる頃の模様は、如何ばかりならんと、都より遙かに遠き、あなた御身の上をのみ、心配して居ることであるとなり、おもひやるとは、想像するをいふ、なみたまぐるゝは、涙の時雨の如く、旅衣にふりかゝるなり○おもひやれ云々一首の意は、露でも時雨でも、皆同じ様なるありさまにて、降りそゞく山中の路を推分け通り來たる、わが袖の涙のまづくの、いかばかり甚しきものなるかを、推量り給へとなり、おもひやれば、後につけて見るべし○このせうどのたりかぬ、この爲子の兄なる爲兼なり、せうとは、兄人の音便にて兄なり○古郷は云々一首の意は、古郷の都をば、冬の初、時雨ふる頃に立立せしあなたの旅衣は、追々寒くなること故、雪の空にては、愈々甚しく冷え渡ることでありませう、さても御困難のことなるかなといふ意にて、たび衣といひて、旅に行くことを知らせ、たちしに衣を裁つと出立の立つとを兼ねていへるなり、いとやは、最々にて、益々甚しくなるをいふ○たび衣云々一首の意は、實に仰の如く、旅衣には、浦よりふき來る風が冷え通して、十月の時雨ふり、曇れる空に雲までも、降り加はり來て、甚だ寒く覺ゆることとなりとなり

式乾門院のみくしげごのこきこゆるは、こがの太政大臣の御むすめ、これも、續後撰よりうちつゞき、二たび三たびの、家々のうちぎゞにも、歌あまた入りたまへるひこなれば、御名もかくれなくこそ。今は、安嘉門院に、御かたごさぶらひたまふ。あづまぢおもひ立ちし、明日ごて、まかりまうしのよしに、北白河ごのへまありしかご、見えさせたまはざりしかば、こよひばかりのいでたち、ものさわがしくて、かくごだにきこえあへず、いそぎいでにしも、こころにかゝりて、おこづれきこゆ

式乾門院のみくしげごの、式乾門院は、利子と申し、後高倉院の皇女なり、四條院の御准母なれば皇后宮と申し奉りしなり、みくしげごのは、御櫛笥殿とかき、もとは髪をとかす品物を置かれたる所なりしが、後には御衣裳などの裁縫所となれり、さてそこには、其の役を奉仕する女ありて、更衣などの如く、天皇に親近し奉るもありたり、このは、天皇の后のにはあらで、式乾門院に仕へて、御櫛笥殿と申しし人をいふなり○こがの太政大臣の御むすめ、久我通光の娘なるをいふ、通光公は、寶治二年薨せらる、この御女の名は、詳ならず○これも、前の爲教の女の事に對して、この御方もまたといへるなり○續後撰、歌集の名、建久三年後嵯峨院の宣によりて、爲家卿の撰集せられしもの○うちぎゞ、打聴きたる歌を、私に書き集めおくものをいふ、即私の家の集なり○二たび三たび、二度三度○御名もかくれなくこそ、其の名も世によく顯れ聞えたりたりとなり、こその下に、あれといふ辭を省けり○安嘉門院、後堀河院の准母にましまし、式乾

門院の妹にわたらせ給ふ○御かたどてさぶらひたまふ 現今にては、安嘉門院の御殿に、御方と申して仕へ居らるとなり、御方は、某殿なごいふに同じく、尊びていふ稱なり○あづまぢおもひ立ちし明日とて、今度鎌倉に來らんと決心せしが、明日立たんとする前日、愈々明日だといひてといふ意なり、立ちしの下に、前日といふ語を入れて見るべし○まかりまうしのように、御暇乞のわけにてといふ義、まかりまうしは、罷申とかきて、他所に行くことを告ぐることなり○北白河の、これ安嘉門院の御在所なり○見えさせ給はざりしかば、生憎、かの御方の居給はざりしなり○こよひばかりのいでたちのさわがしくて、今夜にさし追りたる出立ゆゑ、種々氣がせきてといふ義、明日出立するには、其の夜の中に用意し、發足をするなればかくいへり○かくとだにさこえあへず かやうに、旅行するといふ事だけでも、申上ぐることを能はずしてといふ意、あへずは、なしおはせざるをいふ○いそぎいでにしも、急ぎて出立せしにつけてもとなり○こころにかゝりておどづれきこゆ 心配になる故、消息を參らせたりとなり、かゝりては、かゝる故になごいふに同じ

草の枕ながら、年さへくれぬるこころぼそさ、ゆきのひまなさなど、かきあつめて

きえかへりながむる空もかきくれて

ほごは雲のぞ雪になりゆく

なごきこえたりしを、立かへり、其の御返事、たよりあらばこころがけまる

らせつるを、けふは、こはすの廿二日、ふみまらえて、めづらしくうれしき、まづなにごともこまかにまうしたくさぶらふに、こよひは、御方たがへの行幸の御うへにて、まざる、ほごにて、おもふばかりもいかゞ、ほいなうこそ

○草の枕ながら 旅に居ながらの意、旅中は、草を引結びて、枕とするが、太古のありさまなりし故、後にもかくいへり、これより阿佛尼の手紙にかきしことを述ぶ○年さへくれぬるこころぼそさ、その年も暮になりて、残り少きことの心細く悲しきさま○ゆきのひまなさなど、かきあつめて、雪の間断なくふる事なごを、多く消息の中にかきて、次の歌をしるし、さてかの人の許におくりたりとの意○きえかへり 心の消えて、又きえさえるをいふ、即餘りの悲しさに、肝魂の消えて無くなるが如きなり、かへりとは、幾度もく甚しく繰返さるゝをいふ但し、雪に縁ある語○ながむる空 ながむといふは、たい眺望するにはあらで、悲しき時なき、うつらくと、物を見つゝひるにいへり、これもその意なり○かきくれて 空の曇りて闇くなると、年の暮となるを兼ねたり○ほごは雲居ぞ云々 其の道程の間は、幾重の雲を隔てたる遠き都の空は、雪になりゆくことならんといふ意なり、ほごは、道の程なり、雲居は、遠きこと、皇居のある所を指していふと、二つの義を兼ねていへり○一首の意は、悲しくて絶え入るばかりのさまにて、見上ぐる天も、かき曇りて、年暮になり居れば、遠く道程を隔てたる都の空も定めし今頃は、雪の降りて、さえまざり行くことならんとなり○なごきこえたりしを なごく申上げたりしに○立かへり云云 直ちに引きかへしてといふ義にて、すぐに彼方よりも返書ありたるなり○たよりあらばと云

みつるを、これより其の返書中の詞なり、好便のありたらば、書状をさし上げんと心掛けて居たりしをといふ意にて、あらばの下に、書状を上げんといふを含めたり○けふはしはすの廿二日阿佛尼よりの書状の到着せし日なり、しはすは十二月○ふみまちえてめづらしくうれしき、今まで、常に待ち居たる文を見ることを得たるなれば、ふみまちえてと書きたり、書状を拜見してといふも同じ、されば珍らしくて、悦ばしき限りなしとなり○まづなにこともまかにまうしたくさぶらふに、まづ万事をおきて、早速御返事をさし上げて、此方のこと共、種々詳しく申上げたくは思へどといふ意○こよひは御方たがへの行幸の御うへとて、今夜は丁度、御方達のために、天皇の行幸ある時の事とてとなり、天皇は、後宇多天皇にましますせり、さて御方達は、わが行かんと思ふ方、悪しき方角に當る時、これを避くる爲に、他に行きて方角を轉じ、それより目的の地に至る如くにするをいふ、さて其の悪しき方角といふは、天一神の居る方角なり、源氏物語湖月抄に、天一神は地星の靈なり、中央に立つが故に、中神と號す、四方に五日づつ、四隅に六日づつ、巡行す、かやうに日をかざねて、長々ある故、長神ともいふなり、此神のあるかたをふさがりといふなり、この故に方違あることなり、癸巳より天上して十六日あり、此の間を天一天上といひて、八方へゆきてもさはりなきなり、と見えたり、これにて大畧を知るべし、この事、上古はなかりしを、中古以來は、陰陽家の説盛に行はれしかば、遂に貴賤ともに、かゝる事をやかましく行ひ、無用の費をなしたりしなり○まぎるゝはせにて、混雜するをりからなればといふ義にて、まぎるゝは、こなたとかなたど、事柄の一つになるやうの事をいへり○おもふばかりもいか

いどはいなうこそ、わが思ふはせも、申上ぐることを得べからずと、遺憾に思はるとなり、いかいは、いかいあらん、申述ることを得べきか、得べからずといふ意なり、はいは本意にて、なうは無くなり、思ひ通りにならず口惜しく残念なるよしなり、こその下に、思ひ侍れなといふ詞を加へて見るべし

御たびあすこて、御まゐりありける日しも、峯殿みねのどののもみち見にきて、わかき人々さそひにしほごに、後にこそ、かゝるこころもきこえ候ひしか。なごやかかこも、御たつね候はざりし

ひこかたに袖やぬれましたび衣

さて、それより、雪になりゆくこおしはかりの御返事は

かきくらし雪ふる空のながめにも

こあれば、このたびは、又、たつ日をしらぬごある、御返しばかりをぞきこゆる

心からなにうらむらんだびころも

たつ日をだにもしらす顔にて

○御旅あすこて云々 阿佛尼が、明日出立せんといふ前日、來りし事をさしてらふなり、とて、



といふなどのわけにての意、日しもは、日に丁度なといふ意なり○峰殿のみぢ見にとて 峰殿とは、光明峰寺、關白藤原道家公をいふ、其峯をとりて、峯殿といひけるなるべし、さてこゝは、京都北白河にある道家公の別荘へ、紅葉見物せんため、行きたりとなり○わかき人々さそひにしはどに 年若き人等、われを誘ひて共に行きたりしかば、不在なりし故なといふ程の意○後にこそかゝる事ともさこえ候ひしか 後日に至り、始めて御出立につき、御來訪ありしといふ事を、承はり申したりさといふ意にて、しかは、キ、シ、シカと活く助辭にて、疑の辭にはあらで、たゞ過去をあらはすきなどと同じ助辭なり○なぞやかくとも御たづね候はざりし 何故に、かく來訪あるべき事を、前方より告知らせて尋ね給はざりしとぞ、答めたるなり、なぞやは、なぞか、何の故にてといふ義、御たづねは、何日には行く故、差支へなきかといふ事を、前方より問ひ尋ねて置かざりしとなり、候はざりしの下に、ぞといふ助辭を入れて見るべし○ひとかたに袖やぬれまし 通常に、わが衣の袖の濡ることならんといふ意にて、ひとかたは、甚しきことを一方ならずといふに對し、普通なるをいへるなり、されど、こは一方ならずといふ意を知らせんとて詠める詞なれば、たゞ通常なるにのみ用ひてはよろしからず○たつ日 阿佛尼出立の日と、衣を裁つとの二つを兼ねたり、なほ次のうらみにも、衣の裏を兼ねたり○一首の意は、もしわなたの御出立の日を御聞き申さずして、御別れ申ししならば、さづ一通の悲みにて涙に袖の濡ることであらうに、今は、御出立の日を知りながら、御目に掛らすして、御別れ申しし事なる故、其の遺憾やるかたなく、一方ならず、わが袖の涙にぬることとなり、なりせば、にありしならばの意に

て、上へかへるなり○さてもそれより云々 都の御方よりの消息に、以上の如く記し、さてそれより後の方に、此方より、はとは雲居を雪になりゆくと推量りたる歌を、よみて上げたが、其の歌の返事を、左の如く書したりとなり、おしはかりのといふは、今は冬なる故、定めし都も雪空になりゆくらんといふ意にて、今の歌を詠みて送りし故、かくいへるなり○かさくらし雪ふる云々 一首の意は、打曇りて雪の降る空の悲しきありさなにつきても、程遠き旅住居の哀さを、推量り想やり申しますといふなり、ながめは、悲しきをり、物をウツトリト見つむるをいふ、はとは雲居とは、道の程は、雲居はるかに見やるはとも遠きよしなり、なほ前のきえかへりながむる空もかさくられて云々といふ歌の條を参考すべし○とあれば と書しあればの義○たつ日をしらぬとある云々 今度阿佛尼よりは、ひとかたに云々の歌の返事のみを、彼方へ申遣はしたりとなり、その歌は、次に見えたるものなり○心からならうらむらん 自身にてなしたる事なれば、本心より、何とて人を恨むべきぞといふ意にて、心からは、真心よりなといふに同じ○しらす顔にて 知らぬ如き振りをして居ながらの義○一首の意は、わが旅行に出立する日は、御承知なるべき善なるに、それをも知らぬ様子して、尋ねもし給はずして、今となりて、前方尋ねもせぬなど、本心よりよく恨みのいはることかな、われにいはるゝ恨は、皆御身の罪なるべきにとなり、こは、心易き間故、戯がてら詠みしなり

あかつき、たよりありなきこと、よもすがらおきめて、都の文ごもかく中に、ことへだてなくあはれにたのみかはしたるあね君に、をさなきひこくゝの事

さまざまに書きやるほど、例の浪風はげしくきこゆればたゞいまゆるまの  
のこをぞかきつけける

夜もすがら泪も文もかきあへず

いそこすかぜにひこりおさるて

又おなじさまにて、古郷には戀ひしのぶおとうこのあまうへにも、文たてま  
つるこて、いそものなごのはしくも、いさゝかつゝみあつめて

いたづらにめかりしほやくすさびにも

こひしやなれし里のあま

○あかつきたよりありとさして、今夜の明方に、都に行く便ありといふ故にとなり、都にゆく人  
の曉に出立するをいふ○よもすからおさむて、終夜眠らずに○都の文をもかく中に、こは、都人  
の許に遣る書状を書くその中に、某の君へ細々と頼の事をかきを送るとつゞく意なり○ことにへ  
だてなくおはれたのみかはしたるあね君に、特別に、中より隔意なく、やさしく互に頼にしあ  
ひたる姉君になり、たのみかはすは、互に頼み頼まるゝをいふ、さてこの人は、中院中将とも、  
三位入道ともいふ人なり○をさなき人々の事さ々々に書きやるは、都に残し置きし、幼稚の  
子供等の身の上の事を、種々頼みてやる書状をかく間といふ意にて、をさなき人々は、阿佛尼の  
子、爲相爲守等なり、さまざまには、注意してくれといふことを色々に申送るなり○例の浪風云  
云、常の如く浪風のおど、烈しく聞ゆるゝしなり○たゞ今あるまゝの云々、書状の中に、今實際

聞き居る通りの様子を、歌に詠みて書し遣りたりとの意○かきあへず、泪の方よりいへば、掻き  
拂ひおほせぬにて、幾度拂ひても、止り度なく出づるをいひ、文の方よりいへば、書くこと  
多くして、十分に書き盡し果てぬをいふ、それをかねて、かきあへずといへり、あへば、なし遠  
ぐることなり○一首の意は、風吹きあれて、浪の音烈けしければ、終夜起き居て書をかけども、  
書翰を書き果てず、出づる涙も多くて拂ひ兼ねたり、さても心細きありさまとなり、いそこす  
は、海岸の岩を吹き越すなり、一本にかせをなみとせり、磯越すといふ詞よりいへば、浪の方際  
なるべし○又おなじさまにて、これは、前を承けていへるにて、姉君と同じやうに、親しくいひ  
かはしたるをいふ○古郷には戀ひしのぶおとうこのあまうへにも、古郷の都にては、われを戀ひ  
しく思ひくるる妹の尼君にもといふ意にて、戀ひしのぶは、戀ひしく慕はしく思ふをいふ、おと  
うとは、後世にては、男の弟にいへど、古は姉に對して妹をいふこと常なりき、尼上とは、佛道  
に入りし人ゆゑ、妹ながら尊とびていへるなり○いそものなごのはしくもいさゝかつゝみあつ  
めて、海菜類の切端をも、少し集め裏みてといふ意なり、いそものは、海岸の磯にある種々の物  
をいふべし、例へば、海藻貝殻の類なほなり、さてかく裏みたるは、手紙に添へて尼君に送れる  
なり○めかりしほやく、海藻を刈り取り、潮を煮焼くなり○すさび、手業、戯れがてらなす仕事  
○なれし里のあま、久しく馴れ親みし古郷の尼上といふ意なるを、海事に馴れし地の海人と、  
兩方にいひかけたるなり○一首の意は、何事ともなく、海邊にて菜藻なほを拾ふ戀みにも、住馴れ  
し故郷のあなたを、戀ひしく思はるゝことぞととなり、いたづらにといふは、營業とするな

きふたしかなる目的なきをいふ、こひしやのやは、よは通ふ歎辭  
ほごへて、このおご、ひふたりのかへりご、いごあはれにて、見れば、あねき  
み

たまづさをみるになみだのか、るかな

いそすかぜはきく心地して

このあねきみは、中の院の中將さきこえし人のうへなり、今は三位入道さか  
おなじ世ながら、さほさかりはて、おこなひ居たる人なり。そのおごうごの  
きみも、めかりしほやくごある返事、さまざまにかきつけて、人こふるなみだ  
のうみは、みやごにも、枕の下にたへてなご、やさしくかきて

もうごにもめかりしほやく浦ならば

なか／＼袖に涙はかけじを

この人も、安嘉門院にさぶらひしなり。つゝましくする事ごもを、思ひつらね  
てかきたるも、いごあはれにもをかし

○はごへて、月日たちて後なり○おといひ、兄弟、又は姉妹にいふ稱なるが、こは姉妹なり○い  
ごあはれにて、甚だ感すべく書き記したるなり○たまづさを、手紙をいふ、玉梓の略語にて、玉は  
はめ語、梓は梓弓にて、手紙は、此方より彼方に放ち遣ること、梓弓にて矢を放ち遣る如くなれ  
ば、いふなりとも、又は梓は文字を彫る木なれば、書状をかくいふなりともいふ、後説隠なるが

如し○この歌の意は、あなたの御手紙を拜見するに、いかにも御地のさまの目に見ゆるやあなれ  
ば、磯を吹き越す風をも聞くが如き心持ちして、哀れを覺え、涙も出で、御手紙を濡すほどなり  
となり○中の院の中將さきこえし人のうへなり、聞こえしは、いひしなり、人のうへなりは、人  
なりの意にて、うへは身の上などのうへなり、大鏡などには、人の北方などを、上といひたるも  
おれど、こはそれにはあらざるべし、さればこの姉君は、中院の中將といひし人ごとなり○今  
は三位入道とか、現在は、三位入道といふよしなりとの意、さてかく女にありながら、中將とか  
入道などといふは、かの紫式部、清少納言などいふと同一類なり○おなじ世ながらとはさかりは  
て、同じく、この現世にはありながら、世人とは、全く隔り離れてといふ義にて、俗塵の外に  
立ち居るごいふ○おこなひ居たる人なり、佛道を修行し居たる人なりとなり、おこなひは、修行  
の意○そのおごうご、其の妹なり○めかりさほやく、前のいたづらに云々の歌をさす○さま／＼  
に、いろ／＼澤山に書き記したるなり○人こふる涙の海は都にも枕の下に湛へて、阿佛尼を戀ひ  
慕ふことは、都も同じく甚しく、多く涙の出づるよしなり、涙の海とは、多く涙の出づるを形  
容していへるなり、さて海ごいへるにより湛へてといへり、湛へは、水の一ぱいになることなり  
夜の静かなるをりなど、ことに寝られずて、悲しく思はるゝもの故、枕の下ごいへり○なごやさ  
しくかきて、なごいふ事を、感心にもさほらしく書きて、後に次の歌を添へたり○もろごもに云  
云、この歌は、諸共に浦にありて、海藻を刈り鹽を焼く場合にありしならば、浦にありごとも、  
却りて袖に涙はかくまじきを、かく離れ／＼になり居る故に、袖が涙に濡るゝことなりといふ意

なりなかくは、却りてといふ意にて、浦なれば潮に濡るゝが常なるに、却りて濡れじといひて、其の濡るゝといふは、涙なることをあらはしたり、浦浪なき、うつれも縁語なり○さふらひしなり 以前御仕へ申し人なりとなり○つゝましくすることをも 遠慮して包み隠す事なきをといふ意にて、つゝましは、人に對して憚り隠すべきことをいふ○思ひつらねてかきたるも云々 思ひ通りを、續けて書きたるを見るも、甚だしはらしく感ぜらるるといふ意

ほごなく、年くれて、春にもなりにけり、かすみごめたるながめのたごくしき、谷の戸はごなりなれども、鶯のはつ音だにもおとつれこす、おもひなれにし春の空はるのびがたく、昔のこひしきはごにしも、又みやこのたよりありこつげたる人あれば、れいのごころぐへ文かく中に、いさよふ月ごおとつれたまへりし人の御もごへ

おぼろなる月は都の空ながら

まだきかざりし波のよるく

なご、そこはかごなき事ごもをかきて、きこえたりしを、たしかなる所よりつたはりて、御かへりごごを、いたうほごもへず、まち見たてまつる

ねられじな都の月を身にそへて

なれぬ枕の浪のよるく

○春にもなりにけり 建治四年即弘安元年なり○かすみごめたるながめのたごくしき かすみ

こめたるは、霞の此處彼處に棚引きてあるなり、ながめは、眺望景色なり、たごくしきは、物の暖味なるをいふ、さればこれは、霞のまげく棚引ける春の眺望の、まことにホトツとしたる景色なりとなり○谷の戸はごなりなれども鶯の初音だにもおとつれこす 谷の戸は、谷の門の意なれど、谷といふも同じ、おとつれこすは、音信なきよしにて、聞えざるなり、谷は傍にあれど、春となれば、其處より出で、鳴くといふ鶯の、初聲だけでも聞こえず、まして其他の音信は更になしとなり○おもひなれにし春の空 都の春の景色をいふ、おもひなるゝは、心にしみ着けるにて、常に都にありて、送り迎へし春の空なれば、かきいへり○しのびがたく 堪忍ひ難く思はるるなり○昔のこひしきはごにしも 昔の事の戀ひしく思はるゝ時節丁度といふなり○又都の便ありと告げたる人あれば 又もや都に行く人の便次ありと、報じたる人ある故にて、都のたよりは、都への便の意なり○例の所々への文かく中に 常に文書を往復する人々の所へやる文をかくなり○いさよふ月と云々 前に見えし、ゆくりなくわくがれ出でしいさよひの月やおくれぬかたみなるべきといふ歌とさす○都の空ながら 都の空と同じさまながらの義○波のよるく 波の夜々立騒ぐと、波の岸に寄るとをかけたといへり、よるよるの下に、音を聞くなどの餘意あるなり○一首の意は、春の臚にさす月影は、恰も都の空の如くなれど、都にては、いまだ聞かざりし波の、夜々立騒ぐ音の聞えて、まことに心細しとなり○そこはかごなき事ごも 種々澤山の事柄なり、そこはかごは、事のこれくそれくと一定してあらぬをいふ○たしかなる所よりつたはりて 確實の人よりわが方に持参しくれたるよしなり○いたうほごもへす待見たてまつる それは月日も立たぬ

また、拜見が出来たといふ意にて、いたうは甚だなり、待見は待受け居て見るなり○ねられじな  
 云々、これは都よりの返歌なり、歌の意は、さながら都にて見しまゝの月を眺めて、都のことを思  
 はるゝ上に馴れぬ浪の音を、枕の下に、夜々聞かるとことなれば、戀しさ心細さにて、定めし安  
 穩には寝られ給はぬ事なるべしとなり、ねられじなは、眠られぬことならんとなり、この女は推  
 量していふ辭なり、身にそへては、月の阿佛尼を照らしそれにより都の事を忘れぬといふ  
 權中納言の君は、まぎるゝ事なく、うたをよみたまふ人なれば、此は、ご手なら  
 ひにあたるうたなごも、かきあつめてたてまつる。海近き所なれば、貝なごひ  
 ろふをりも、なぐさの濱ならねば、猶なき心ちしてなごかきて

いかにしてゑはし都を忘れ貝

ゑらざりし浦山かぜも梅がゝは 浪のひまなくわれぞくだくる

都ににたる春のあけほの

花ぐもりながめてわたる浦かぜに 霞たゝよふ春の夜の月

あづまぢの磯山風のたえまより 涙さへ花のおもかげにたつ

みやこ人おもひもいでばあづまぢの

花やいかにごおごづれてまじ

なご、たゝ筆にまかせて、おもふまゝに、いそぎたるつかひにて、かきさすや  
 うなりしを、又ほごへず、返事をたまへり。日ごろのおぼつかなきも、此の文  
 にかすみはれぬる心ちして、なごあり

頼むぞよゑほひにひろふうつせ貝  
 くらへみよ霞のうちの春の月  
 かひある浪の立ちかへる世を  
 はれぬこゝろはおなじながめを  
 ゑら浪の色もひごつにちる花を  
 おもひやるさへおもかげにたつ  
 東路のさくらをみてもわすれずば  
 都の花を人やごはまし

○權中納言の君 前に見ゆ、爲教の女なり○まぎるゝ事なく、まぎるゝは、他の事と混雜する類  
 をいふ、故にこゝは他事をせず一心にといふ意なり○此のはご手ならひにしたる云々、この頃習  
 字のために書き散らしし歌をさし上げたりとなり、謙下りたるなり○名草の濱ならねばなほなき  
 心ちして、名草の濱は紀伊國なり、貝多きを以て名ある所なり、その名草に戀むといふをかけた  
 り、なき心ちは、かひなき心持の意にて、前に貝のことをいへる故、こゝは省きていへるあり、され

ば、この意は、貝なごを拾ふ時も、心を慰むるに足らざれば、拾ふ効なき心持がして困るなごいふ詞を書きて、さて次の歌を記したりとなり○いかにして、さうかして、暫時都を忘れんとすれど、忘れられずとなり○忘貝 貝の名なれど、一種あるにはあらざるべし、或は蛤類の紋形あるものなりとも、紅色したる貝なりともいへり、こゝは都の事を忘るといふに掛けていへり○われぞくだくる くだくるは、浪の縁語にて、都を思ひて種々に心を悩ますをいふ○一首の意はあまり悲しき故、いかにもして都の事を、暫時忘れんとすれど更に忘れられず、都の事にて常始終心を碎き思を悩まして、居る事なりとなり○まらざりし云々 曾て知らざりし浦の山より吹く風も梅が香を送ることなるが、其の香だけは、都と同じやうなる春の早朝のありさまであるといふ意なり○花ぐもり 花のさく頃、薄く曇るをいふ○ながめてわたる 眺め見渡すなり、即物思ひに霞める空を見渡すをいふ、わたるといひしは、風にかけて、風のかなたより此方へ吹き渡るよしにいへるなり○一首の意は、物思ひに打仰ぐ空は、わが心の如く、薄く曇り居るが、浦風の吹くために、霞の往來して、春の夜の月も、おぼろに見ゆとなり○花のおもかげにたつ 花を見ゆるやうに立ちあがるとなり、面影は様子なり、立つは、常に目にたつなごいふたと同じ○この歌の意は、東國の海邊の山に生ふる松の木の間より、浪までが花の摸様に見ゆとなり○都人おもひもいふば云々 一首の意は、都に住むわたがたが、もし私を思ひ出だした下されたならば、東國の花はさのやうであるかと、問ひ尋ねて下されうなものであるとなり○たゞふでにまかせておもふまゝに たゞ筆の運びにまかせて、思ふに隨ひて書きたりとなり○いそぎたるつかひとて書きた

らすやうなりしを 書きたすは、半書きて筆をさし置くなり、急ぎの使なるため、十分に書き終へぬありさまなりしにの意なり○ほごへす云々 間もなく返輪ありたり○日ごろのおぼつかなきも 日ごろは数日來なごいふ意にて、此頃と同じ、おぼつかなきは、阿佛尼の身上の、心元なく心配に思はるゝをいふ○此の文にかすみはれぬる心ちしてなごあり 此の度給はりし書狀にて、御様子もわかり、霞の晴れたる如く、心持も清々したりなごいふことを、書きてありたりとなり○うつせ貝 實のなき空しき貝なり、この貝の如く、空しからで實効あるといふ意につけたりと覺ゆ○頼むぞよ云々 一首の意は、たゞわたの思の達して、都に立戻らるゝ時を頼みにし、祈るといふことなり、それを前に阿佛尼より、貝を拾ふよしをいひ遣りたる故、こゝたよりも、貝のことに寄せていひたるなり、頼むよは、頼みにすることとなり、かひある浪は、かひは願の達してその效あるなり、浪は立かへるといふをいはんため、立かへるは、阿佛尼の再び都に立戻るといふ○おなじながめを 同じく、心の晴れくせざるを、比較して見よと、上にかへる意にてながめは、眺望にて、くもれる景色ありさまなごいふ義に用ひたり○一首の意は、霞につまれたる月影と、わが心の晴れくせぬさまを比べて見給へ、いづれを勝れりとするか、恐らくはわが心のかたまされるなるべしとなり○まら浪の云々 白浪の色も、同じ様に白く見えて、散る所の花を、都より想像するだけでも、目の前に見ゆるが如しといふ意なり、おもひやるは、思ひを遣るにて、離れたる所の事を、推し考ふるなり、おもかげにたつは、前にいへり○東路の云々 一首の意は、東國の櫻花を見るにつけても、都の事を忘れずあらば、其處の花は咲けりや

否やと、問ひ尋ねてくれることをあらう、もらいたいものであるとなり、すべてこの四首の歌は、前に阿佛尼より詠みてやりたる歌の返事ゆゑ、前の歌をよく心得、それに照らし合せて解釋すべきなり

やよひのすゑつかた、わか／＼しまわらはやみにや、日まぜにおこるこゝろ、二たびになりぬ。あや／＼うほははてたるこゝろ、あしながら、三たびになるべきあかつきよりおきゐて、佛のおまへにて、心を二にして、ほく／＼やうをよみつ。そのあるしにや、なごりもなくおちたるをりしも、都のたよりめれば、かかる事こそなき、古郷へもつげやるついでに、れいの權中納言の御もつた、びの空にてあやふきはほのこゝろ、ほそきも、さすが御法のあるしにや、今日まではかけこめて、ごかきて

いたづらにあまのしほやく煙ごも

ご聞えたりしを、おごろきてかへりごご、ごくし給へり

消えもせじわかの浦路に年をへて

光をそふるあまのもしほび

御經のゑるし、いごたふごくて

たのもしな身にそふ友ごなりにけり

たへなる法の花の契は

○やよひのすゑつかた 三月の下旬、やよひは彌生の義にて、草木の繁る頃なれば、いふなりとぞ○わか／＼しまわらはやみにや 輕症の瘧をいふ、わかは、物の十分に成立たぬをいふ語ゆゑ、こゝは、重からぬ意に用ひたり、わらはやみは、瘧ども、普通にはオコリともいへり、和名抄に、瘧寒熱並作二日一發之病也云々とあり、時を定めておこる熱の病なり、にやはにてやあらんといふ意なり○日まぜにおこること二たびになりぬ 日まぜは、日を間にませるなれば、一日置なり、一日を隔てて二度發病せしとなり○あやしうまははてたる心ちしながら 甚だ疲勞なしはてたる心持はせしかどの意、あやしうは、不思議にて、常とことなりて、妙に思はるゝ位なるをいふ、故に甚しき義となるなり、まははは、まほむ萎るなると同じく、ぐたりとすることなり○三たびになるべき云々 三度目の發るべき明方より起さしなり○心を二にして 一心になりてなり○なごりもなくおちたる 少しも残らず、悉く皆落ちたるなり、落つるは、病の癒ゆるをいふ○かかる事こそなき かやうの事ありたりと、病の頗末を報じたるなり○れいの云々 いづも遣る爲の女の許にも書状を送りしなり○たびの空にて云々 これより書状の文句なり○あやふきはほのこゝろ、病にかゝりて、命の危き時の、心細く悲しき事なをいふ意にて、旅の中故、少しの病にても、悲しく思はるゝよしなり○さすが御法のしるしにや さすがは、しかしながらまだ、さはさりながらなごの義なり、かく危く心細き中ながら、有難き佛法の靈驗にてやあらんといふ意○たれかほみまし 誰れか見るべきか、誰れも見ることとはなかるべしとなり、さてその

見るといふは、思ふと同じ意なり○風に消えなば 無常の風に誘はれて、はかなく死にしならば  
 の意にて、煙は風に消ゆるものなれば、かく 〇いたづらに云々 もしわが身の死ぬる事あ  
 らばこゝは海邊なれど、たゞ海士が鹽を焼 所の、煙の立ち登るは世にも、たれか見てくるべき  
 か、誰れもさやうには、思はざるべし、即ち誰人も哀れと思ひ、弔ひくる人もなからんとなり、  
 さてかく煙といふは、火葬にする習はしなれば、其の意にていへるなり○驚きて 病氣にて心細  
 ささまにいひやりたればなり○消えもせじ云々 和歌の道に、數年携はりて、名譽をあらはす人  
 なれば、さやうに容易くは失する事はなき筈なり、必ず神々も守り給ふべければなほの意なり、  
 わかの浦路に、和歌の道をかけ、下の海人のもしはびと照應せしめたり、もしはびは鹽焼く煙火  
 なること上にいへり、又その火といふを承けて、上に消えもせじといひ、死なざるべきことの意  
 をあらはしたるなり○御經のまゐりし 前の法華經の靈驗なり○たのもしな 頼みにさるゝ事よ、  
 心丈夫の事かななほの意○身にそふ友 わが身に附随ふ守 ○たへなる法の花の契は たへなる  
 は妙、のりは法、花は蓮花あり○一首の意は、佛の衆生を救はんために、説き給ひたる法華經は、  
 わが身に附随ふ友の如くに全くなりたり、さても、心丈夫の事かなとなり、契は衆生を救は  
 んとの誓をさしていへるにて、又友といふに縁ある詞なり  
 卯月のはじめつかた、たよりあれば、又おなじ人の御もごへ、こそのはるなつ  
 のこひしさなど、かきて  
 見し世こそかはらざるらめ暮れはて、

春より夏にうつる梢も

なつ衣はやたちかへて都人

いまやまつらん山ほごぎす

その返事、又あり

草も木もこそみしまゝにかはらねど

ありしにも似ぬ心ちのみして

さてほごぎすの御たづねこそ

人よりも心つくしてほごぎす

たゞ一聲をけふぞきゝつる

さねかたの中將の、五月まで時鳥さかて、みちのくににより、みやこには、きゝふ  
 るすらん時鳥、せきのこなたの身こそつらけれごかや、申されたる事の候ふ  
 な、其のためこそ、おもひいでられて、此の文こそ、ここにやさしくなごかき  
 て、おこせたまへり、さるほごに、卯月のするになりければ、郭公のはつねほ  
 のかにもおもひたえたり、人づてにきけば、ひきのやつさいふごころに、あま  
 たこそなきけるを、人ききたりなごいふをきゝて

あつねはひきのやつなる時鳥

くもるにたかくいつかなのらん



など、ひりりおもへるもそのかひもなしもよりあつまぢは、みぢのおくま  
で、さかこより、ほろりさすまれなるならひにやありけん。一すぢに、又なかず  
はよし、まれにも聞く人ありけるこそ、人わきしけるよし、心づくしにうらめ  
しけれ

○卯月のはじりつかた 四月の初旬、卯の花の盛なる頃なれば、卯月といふ○同じ人の御許へ、や  
はり爲敷の女のもとに○ごぞの春夏の戀ひしなごかきて 去年の春夏のころ、都にありて親し  
く交りし事の、戀しきよしなごを書きししてといふ意なり○見し世こそ云々、去年見たる都の  
さまも、變らざるこゝたらん、その年も暮れゆきて、今年の春より夏に移りかはる木々のさま  
も、また去年に同じくといふ意なり、見し世は、昔見し世の義なり、何事も昔と同じからんと  
思ふも、甚だ戀しく思はるとなり○なつ衣はやたちかへて云々、夏着る衣服をば、最早縫ひかへ  
て、着るばかりになし、今頃は丁度、山になく杜鵑を待ちて居ることならんとなり、たちかへて、  
裁ち縫ひ換ふるなり○草も木も云々、一首の意は、山川草木、一として去年の如くにて、別に變  
化もなければ、昔とは、同じからぬ心持ばかりして、さびしくてなりませぬ、これ全く、君のま  
しまさぬたりのなれば、猶更君が戀ひしく思はるゝことなりとなり、ありしにもは、昔、在りしに  
もといふ義なり、のみしての下に、のみしていかにも心寂しなごの意を念みたが○さてほど、さ  
すの御尋ねこそ、これも、手紙の文の中なり、御尋ねこそ、かくは答へ申さぬなごの意なり○人よ  
うも云々、他人より、辛苦して、たゞ一聲のみを、今日始めて聞きしことなりといふ意にて、や

うら、鳴き初めしよしなり○さねかたの中將 近衛の中將藤原實方なり、一條天皇の御時、行成  
に向ひ、禁中にて暴行に及びしかば、陸奥に左遷せられたる人なり○ささふるすらん 久しく聞  
き馴れしならんとの意にて、ふるすは、古くなるなり○せきのこなたの身こそつらけれ 關は逢  
坂關なるべし、關より東にある身こそ、まことにくるしきものである、都にては、幾度聞きしか  
わからざる程の郭公を、まを聞かすにあることとなり○とかや申されたる事の候ふな、とかい  
ふやうに、實方より都の人に申遣はされたる事のありますといふ意にて、なは歎辭なり○そ  
の例と思ひ出でられて 其の時の先例と同じものと思ひ合せられてなり○此の文こそことばや  
しく、此の度の御消息は、ことにしはらしく、優に覺えたりとなり○おこせたまへりよこし送  
り給へり○さるほどに 其のうちにかれこれする間に○郭公の初音はのかにも思ひ絶えたり、最  
初の程は、今に鳴くかゝと思ひ居たれど、時候過ぎて、四月下旬になりても鳴かぬ故、郭公の  
初音を聞く事は、全く断念せりとなり、はのかにもは、かすかに聞かんとすることもといふに  
て、初は遠方のなりとも聞かんとせしが、今はそれをも断念せりとの意なり○人づてはさけは、  
人よりの便に聞けばにて、人づては、人より傳ふること○比企の谷 妙本寺といふ寺のある所な  
り○あまたこゑ 數聲○しのびね 郭公の初程、聲のいまだ高からぬをいふ、忍音○なのらん  
わが名を高く呼び揚ぐるにて、こゝは鳴くをいへり○この歌の意は、かすかに鳴く音は、低く  
ある時鳥が、雲の上に聲高く、うつ鳴くであらうか、さても早くさゝたさとなりとなり、なほ  
ひさの谷に、低きといふをまかねたり、そは、低きを古言にひきともいひたればなり○なごひと

りおもへどもそのかひもあらずし、なほいふやうに、阿佛尼一人考ふれど、其の效も見えずとなり。按ふに、これは、たゞ時鳥の事のみならず、自家の訴にちて、早く公明正大に、横領せられたる領地をとりかへしなすよしをも、含めるなるべし。○みちのおくまで、陸奥出羽のはてまで、○一すぢに又なみずばよし、全く一聲も鳴かずば、彼是思ふまじとなり、一すぢは、少しも他の事の難らぬにいふ語ゆゑ、全くと同じ義なり。○人わきしけるよと、人わきは、人を區別する事なり、なくとも鳴かぬとあるは、人の好き好かぬ愛憎によりて、區別したることよと思はれて、恨しとなくとも心づくしに、氣をもむことなるが、こゝは副詞ゆゑ、甚しくなをいふ意なり。

又、和徳門院の新中納言とさきこゆるは、京極の中納言定家の御むすめ、ふか草のさきの齋宮とさきこゆるに、ちんの中納言のまゐらせおき給へるまゝにて、年へ給ひにける。此の女院は、齋宮の御子にしたてまつり給へりしかば、つたはりてさふらひ給ふなり。うきみこがるゝもかり舟など、よみたまへりじ。民部卿のすけのせうごにてぞおはする。さる人の子にて、あやしき歌よみて、人にはきかれじ。あながちにつゝみ給ひしかば、はるかなるたびの空、おぼつかなさに、あはれなる事ごもをかきつゝけて

いかばかり子をおもふつるのさびわかれ  
 ならはぬたびの空になくらん  
 文のことはにつけて、歌のやうにもあらず、かきなし給へるも、人より

はなほさりならずおぼゆ。御かへりこは

それゆるにさびわかれてもあしたづの

子をおもふかたはなほぞかなしき

さきこゆる

○和徳門院 仲恭大皇の皇女、義子内親王と申し奉る。○さきこゆるは、申すはの義。○定家の御むすめ、新中納言といふは、即定家卿の息女なりとなり。○ふか草のさきの齋宮、この齋宮は、後鳥羽天皇の皇女、親子内親王と申したり。順徳天皇の時、伊勢に赴き給へり、ふか草といふは、深草の里にまじしことあればなるべし。○ちんの中納言、定家卿○まゐらせおき給へるまゝにて年へ給ひにける。御殿へ差上げ仕へ奉らしめたるが、其の儘にて、幾年をも過ぎたりとなり。○此の女院は云々、和徳門院は、右の齋宮の御子分とならせ給ひし故、引き續きて、この門院に仕へ奉らるゝよしなり。傳はりては、齋宮より傳はりての義なり。○うきみこがるゝもかり舟、この歌は、續後撰集に見えて、瀬江にうきみこがるゝもかり舟、はてはゆきさきのかげだにも見ず、とあるこれなり、もかり舟は、藻荇舟なり、舟は漕ぐもの故、戀ひこがるゝと、漕がるゝとにいひかけたり。○民部卿の典侍、即ち右の歌主にて、後堀河院の民部卿の典侍といひし人なり、典侍をスケと訓むは、内侍の中にて、尙侍は第一にてカミ、典侍は第二なるゆゑ、四分の官に配當して、スケといへるなり。○せうごにてぞおはする、前の新中納言は、この典侍の姉なりとなり、せうごは兄人なれど、妹を弟といふ如く、姉をもかくいへるなり。○さる人の子にて、一角立派なる人の子女

にての ○あやしき歌よみて 不思議に、悪き歌詠みてといふにて、自身謙退していへるなり○  
 人にはさかれじとあながちにつゝみ給ひしかば 他人に聞かれざるやうにせんといひて、強ひて  
 秘し居たれをといふ意なり、さかれじは、聞かれまいと用意するなり○はるかなるたびの空おぼ  
 つかなさに 遠方の旅中の事が、氣遣はしき故にといふ意○あはれなる事をもかきついで  
 種々多く感すべき事を書き載せたるよしなり○いかばかり云々 この歌の意は、子を思ふ鶴の、  
 親子飛び離れて、馴れぬ旅路に、その位、子を悲み慕ひて鳴くことならん、定めし甚しく悲しく  
 思ひ居ることならん、阿佛を鶴になして詠めるなり、いかばかりは、鳴くらんといふに直接に  
 かゝる詞なり、ならぬは、不馴なるなり○文のことばにつけて 文と同じ様に書きたるなり  
 ○人よりは云々、他人よりは、注意深きやう思はれて、奥ゆかしとなり○それゆゑに 子故のた  
 めになどいふ意にて、子を大切に思ふ故、わざと悲を忍びて都を出でしをいふ○置たづ 葦間  
 に居る鶴なり○この歌の意は、子の爲の故に、忍びて別れ來ても、やはり子を思ふ方の心は、切  
 に悲しく思はれて、いつも慕はしとなり

そのついでに、故入道大納言、草のまくらにもたちそひて、ゆめにみえさせ給  
 ふよしなど、この人ばかりや、あはれもおぼさんとして、かきつけてたてまつ  
 る

都までかたるも遠しおもひねに

このぶむかしの夢のなごりを

はかなしや旅ねの夢にまよひきて

なごかきて、たてまつりしを、又あながちにたよりたづねて、かへりこころした

まへり。さしもあとのび給へりしも、をりからなりけり

東路の草のまくらはごほけれど

かたれば近きいにしへのゆめ

いつくより旅ねのゆかにかよふらん

おもひおきつる露をたづねて

なごの給へり

○そのついでに 其のそりの文通の便に○故入道大納言 阿佛尼の夫爲家をいふ○草の枕にも  
 旅行中をいふ、古は旅行するに、草なを引結ひて寝ねたるもの故、かきいへり ○たちそひて  
 夢にみえさせ給ふよしなど 旅行中の枕邊につき添ひて、夢の中にも見えさせられたり、なごい  
 ふことこの意なり○この人ばかりやあはれもおぼさんとして この人のみは、尤もと感じ給ふらん  
 と思ひての意なり○おもひねに 人を思ひて寝るをいふ○一首の意は、亡き人を思ひて、寝る夢  
 の中に、見たる事を、都まで申し上げるも遠きことなりといふにて、しのぶ昔は、戀忍ぶ昔のこ  
 となり、夢のなごりとは、夢の如きはかなきこの世の名残と、實の夢の中に見たる名残とを、か  
 ねていふなり、遠しといふも、昔といふに縁ある詞にて、たゞ都までの道程のみをいへるにはあ

らす〇はかなしや云々。さてくもろく悲しきことよ、わが旅寝の夢の中に迷ひ来て、見えしものを、覺めて見れば、實際は世にあらぬ人の容貌を思ふに、さても悲しきことよとなり、おもかげは、面影にて容貌をいふ〇あながちに、強ひて、骨折りて、事更になり〇さしものひ給へりしも折柄なりけり。それ程に、強く歌を秘し居たるも、場合によることなりきといふ意にて、この人は、前に下手の歌を他人に見られじと、常に秘したる事なれば、今も秘すべきに、次の如く詠歌を送られしを見れば、秘すといふも、其の事柄場合によるわけであると覺れるよしなり、さしもは、あれまでにひびくの義なり〇東路の云々。東國の旅路の空は遠くあれども、昔の事を語る時は、近く思はるゝことよとなり、こは遠きと近きとにて、詞をわやなしたるにて、夢の事は、まな遠き昔の事にもあらで、直ぐ目の前なるやう思はるれば、かくいへり〇いつくより云々。一首の意は、この世に遺し置き給へるあなたを尋ねて、何れの所より旅中の宿に、故人の來て、夢に見え給ふならん、さてもわはれのことよとなり、旅ねのゆかには、露しげきもの故、つゆとよみ、そのつゆは、又おもひ置きつるといはんとて詠みしものにて、思ひおきつるは、死ぬる際に心にかけて行きたるをいふ。

なつのほごは、あやしきまでおどつれもたえて、おぼつかなきも一かたならず。みやこのかたは、志賀のうらなみたち、山、三井寺のさわきなきことゆるも、いごにおぼつかなし。からうじて八月二日ぞ、つかひまちえて、日ごろより、おきたりける人々のふみごも、こりあつめてみつる。

〇わやしきまでおどつれもたえて云々。夏頃は、不思議なるほど文通もなき故、心配も一通ならずとなり〇志賀の浦浪たち山三井寺のさわき。共に都に騒動のありしをいふ、志賀の浦は近江なり、浪のたつは、世の騒がしきなり、山は比叡山延暦寺、三井寺は園城寺なり、帝王編年記に、弘安元年五月十二日己時、日吉神興三基、入浴、依園城寺金堂供養也、十六日日吉神興各歸空とあるこれなり、延暦寺と三井寺とは、互に遺恨を含めりしに、この時三井寺の金堂供養ありしによりて、かく朝廷を騒がせ奉りしなり〇いごにおぼつかなし。如何になりたるならんと思はれて、愈々氣遣はしとなり〇からうじて。ヤットの事にて〇つかひまちえて。待ち居たる使を得てなり〇日ごろよりおきたりける。永くため置きたるにて、使人、一々持ち來らず多く集まるを待ち、一纏になして持参したるよしなり。

侍従のさいしやうの君のもごより、五十首の和歌をよみたりけること、きよがきもしあへず、くだされたり。歌も、いごをかしくなりにけり。五十首に、十八首てんあひぬるも、あやしき心のやみのひがめこそあるらめ。その中に

心のみへだてずこもたび衣

山路かさなるをちのしらくも

ごある歌をみるに、たびの空を思ひおこせて、よまれたるにこそはご、心をやりて、あはれなれば、その歌のかたはらに、もじちひさく、返事をぞかきそへてやる

戀ひしのふ心やたぐふあさ夕に

ゆきてはかへるをちのしらくも

又おなじたびの題にて

かりそめの草の枕のよなくを

おもひやるにも袖ぞ露けき

とある所にも、又かへりごとをぞかきそへたる

秋ふかき草のまくらにわれぞなく

ふりすて、こし鈴虫のねを

又、此の五十首のうたのおくに、こごばを書きそふ。おほかた、歌のさまなど

しるこつて、おくに、昔の人の歌

これを見ばいか斗かとおもひつる

人にかはりてねこそなかるれ

こかきつく

○侍従の宰相の君 爲相なり、侍従宰相の事上に入り○さよがきもしあへず下されたり 清書  
をもなしあへず、そのまゝ都より下したりといふにて、しあへずとは、なし果さるるをいふ○歌  
もいとをかしくなりけり 歌も意外に面白く上手になりたることであるとなり○てんあひぬる  
も、同意を表するを合點といふ、この歌は、いかにも尤なりと思はるゝもの、五十首のうち

300005

十八首ありたりとなり○あやししく心のやみのひがめこそあるらめ 不思議に思はれ、子を愛する  
心の引負目より、かくよく見ゆるにてもあらんかとなり、心のやみは、親の子を思ふ時は、道理  
にも聞くなるよしにていへるなり、ひがめは、正しからず間違の見かたなり○山路かさなるをち  
のしら雲 山路幾重も立隔て、遠方に見ゆる白雲の空の方に居給ふこと故、そのかひなしとい  
ふ意なり○一首の意は、心ばかりは隔てず親しくしたりとも、旅行して遠方においては、そのかひ  
なしとなり○たびの空を思ひおこせてよまれたるにこそはと 旅中の事を想像して、詠みしに相  
違なしと思はれたりとの意○心をやりてあはれなれば、彼方の事も思はれて不惑なる故となり○  
戀ひしのふ云々 一首の意は、そなたを戀ひ慕ふわが心が、それに乗りうつりてあることかしら  
ん、朝夕常に、白雲がわちらの方とこちらの方とに往來して居ることであるとなり、たぐふは、  
似奇るといふ事にて、立副ひてあるをいふ、をちは遠方なり、遠方の白雲が往來するは、わが心  
の常に都の空にあくがるゝに同じきをいへり○たびの題 旅中の題○かりそめの草の枕の云々  
た、一寸の旅中の、夜毎の事を想像するにも、哀れに思はれて、袖がさことにしめつばさことで  
あるとなり、草といひ露といふなど、例の縁語なり○又かへりごとをぞかきそへたる 又返事  
を、その歌の傍に、阿佛尼が書き記し添へたりとなり○秋ふかき云々 鈴虫の如き音を出だし  
て、秋の半過ぐる旅中に、都に遣し置さし子を思ひて、泣き悲しむとなり、ふりすてしといふ  
は、鈴は振り鳴らすもの故、その縁にて、子供を都に置きて來たりしを、かねていへるなり、鈴  
虫のねとは、鈴虫の如く聲ねを立て、鳴くといふ意なり○こごばを書きそふ 文章をも書き加へ

たり○おはかた歌のさまなをしるしつけて 大概に、歌の心得なを書きしるしたるなり。これや  
がて前にいへることばなり○昔の人の歌、爲家卿の歌なり○これをみば云々 一首の意は、この  
歌を見たならば、いか程か悲しく思ふらんと思ひたりし人にかはりて、今は已がたゞ一向歎かる  
ゝことよとなり、按ずるに、こは親が子のために、片身なを遣し置く時、この品を見て、子は後  
にこの位悲むならんと思ひ、悲みし人にかはりて、歎かるゝよしを詠みたるなるが、こゝは阿佛  
尼が、故夫爲家卿に代りて、爲相の歌を悲しく思ふよしに、いひなしたるなり

侍従の弟爲守の君のももよりも、三十首のうたをおくりて、これにてんあひ  
て、わろからん事を、こまかにあるしたへといはれたり。こゝこは、十六ぞか  
ゝ。歌のくちなれば、やさしくおぼゆるも、かへすがへす、心のやみこ、かたは  
らいたくなん。これも、たびのうたには、こなたをおもひてよみたりけりこみ  
ゆ。下りしほごの日記を、この人々のももへつかはしたりしを、よまれたりけ  
るなめり

立ちわかれふじのけぶりをみても

なほ心ほそさのいかにそひけん

また、これも返しをかきつく

かりそめに立別れても子をおもふ

おもひをふじの煙とぞみし

○これに點あひて この歌に點をつけてなり、即阿佛尼のよしと思ふに、合點を施すなり○わろ  
からん事をこまかにしるしたべといはれたりもし悪く拙き事もあらば、詳細に記し給へと書さ  
たりとなり、懇に批評を願ふといふ意、たゞは給はりたしに同じ○ことしは十六ぞかし 今年即  
弘安元年は、爲守十六歳となり、されど爲守は、嘉暦三年六十四にて死去したること、常樂記  
に見えたれば、今年は十四の筈なりと、殘月抄にいへり、諸本十六とあれば、俄に誤ともなし難  
し、なほ考ふべし○歌のくちなればやさしくおぼゆるも 歌詠者の口振なる故、殊勝に思はるゝ  
もといふ意なり、くちは詠み工合が、少年なれども、歌人の風あるをいふ○かへすゝ心のやみ  
どかたはらいたくなん 引負の愆目と思はれて、甚だうしろめだしとなり、かへすゝは、物の  
戀にせらるゝことなれば、こゝは甚といふ意なり、かたはらいたくは、物事のをかきこと、氣  
の毒のことに使へり、こゝは可笑きかたにて、かくよしと思ふを、他人より見ば、いかに馬鹿げ  
てをかしく思はるゝならんと、恥づるよしに、謙遜していへるなり○これも 前の爲相のに對して  
いへり○よみたりけりとみゆ 詠みたるのであると想像せらるるなり○下りしほごの日記 鎌倉  
に下向せしをりの日記を、爲守の許へ贈りしが、それを見て、その中の事を詠みたるならんと思  
はるゝよしなり、なめりは、なるべしといふが、如し○たちわかれ云々 一首の意は、都を離れ  
て、たゞでも悲しきに、富士山の煙を見るに及んでは、その上に如何ほど、心細きことの、加は  
りしことならん、思ひやるだに、甚しさが知らるとなり、立ちといひ、煙といひ、ほそしといふ、  
皆縁語なり、爲守の歌○かりそめに立ち別れ云々 一寸都を離れ來ても、わが子をおもふ情のおも

へ難く熟することが、丁度富士の煙が立つと同じやうに、思はれたといふ意にて、見しは、思ひしと同じ義なり

また、權中納言の君、こまやかに文かきて、くだり給ひし後は、うたよむ友もなくて、秋になりては、いさゝおもひいできこゆるまゝに、ひこり月をのみながめあかして、なごかきて

東路の空なつかしきがたみだに

忍ぶ泪にくもる月かげ

此の御返事、これも古郷の戀しさなごかきて

かよふらし都の外の月みても

都の歌ごも、この、ちおほくつもりたり。又かきつくべし

○權中納言の君 爲教の女なること前に見えたり○くだり給ひし後は、これより、其の書中の詞なり、阿佛尼の鎌倉に出立ちし後はなり○秋になりては、いさゝおもひいできこゆるまゝに、たいにても寂しさに、秋期となりては、益御身を慕はしく思ふによりてといふ意なり○ひとり月をのみながめあかして、一人寂しく、月のみを友として、歎きつゝ一夜を明かしてをりまするなど、書きしるしたるなり○東路の云々、暮はしく思ふ東國の、あなたの記念と思ひながむる月影までも、わやにく悲しく思はるゝ涙にくれて、憂ることである、まことに寂しく心細きことなり

といふ意にて、空なつかしきといふは、阿佛尼を戀ひしく思ふよしなり○古郷の戀しさなごかきて、阿佛尼よりの返事にも、故郷の都の戀しさよしを書きしるし、後に次の返歌をかきたり○かよふらし云々、一首の意は、都の外の方を見ても、都の空を慕はしく思ふ心の歎きは、丁度あなたが、都にてわが身と思ひ下さるゝと同じことならんとなり、かよふらしは、君とわれとは似通ひて同じことならんといふ意、おなじながめは、同じやうなる悲歎はといふと、月を見上げたる様子ど、両方にいひかけたるなり○都の歌ごも云々、暫くこゝにて筆を止むれどこの後にも都よりおこせたる歌多くありたり、をりもあらば、更にかきしるさんとの意なり

しき鳥や	やまこの國は	あめつちの	ひらけ初めし
むかしより	岩戸をあけて	おもしろき	かぐらのこごば
うたひてし	さればかこき	ためしえて	ひじりの御世の
みちしるく	人のこゝろを	たねごして	よろづのわざを
ここのはに	をに神までも	あはれごて	八島のほかの
よつのうみ	波もしづかに	をさまりて	空ふく風も
やはらかに	枝もならさず	ふるあめも	時さだまれば
きみくの	みここのまゝに	したがひて	わかぬ浦路の
もしほぐさ	かきあつめたる	あごおほく	それが中にも
名をこめて	三代までつぎし	人の子の	親のこりわき

ゆづりてし	そのまごさへ	ありながら	おもへばいやし
しなのなる	そのは、木々の	そのはらに	たねをまきたる
ごがごてや	世にもつかへよ	いけるよの	身をたすけよ
ちきりおく	すまごあかしの	つゝきなる	ほそ川山の
山がはの	わづかにいのち	かけひきて	つたひし水の
みなかみも	せきごめられて	いまはたゝ	くがにあがれる
いののごこ	かぢをたえたる	ふねのごこ	よるかたもなく
わびはつる	子をおもふとて	よるのつる	なく／＼みやこ
いでしかご	身はかすならず	かまくらの	世のまつりごこ
しげゝれば	きこえあげてし	ここのはも	枝にこもりて
むめのはな	よごせの春に	なりにけり	行くへもしらぬ
なかぞらの	風にまかする	ふるさこは	軒端もあれて
さゝがにの	いかさまにかは	なりぬらん	世々の跡ある
玉づさも	さて朽はてば	あしはらの	道もすたれて
いかならん	これをおもへば	わたくしの	なげきのみかは
世のためも	つらきためごこ	なりぬべし	行くさきかけて

さまぐくに	かきのこされし	筆のあと	かへす／＼も
いつほりに	おもはまじかは	こごわりを	たゞすの森の
ゆふじでに	やよやいさゝか	かけてこへ	みだりがはじき
すゑの世に	あさはあごなく	なりぬごか	いさめおきしを
わすれずば	ゆがめる事を	またたれか	引きなほすべき
ごばかりに	身をかへりみず	たのむぞま	そのよを聞けば
さてもさは	のこるよもぎこ	かこちてし	人のなきけも
かゝりけり	おなじはりまの	さかひとて	一つながれを
くみじかは	野中のしみつ	よごむごも	もこの心に
まかせつゝ	ごこほりなき	みづくきの	あごさへあらば
いごゝしく	つるがをかへの	朝日かげ	八千代のひかり
さしそへて	あきらけき世の	なほもさかえん	
ながゝれ	れご朝夕いのる君が代を		

やまごこごばにけふぞのへつる

○しき島やまごの國は、しき島は、大和國の枕詞なり、大和に磯城郡ありて、その中に磯城島といふもありて、其處には、久しく上代の天皇の、皇居を置給ひしかば、名高き所となりて、大和の上に冠らせていひしが、後には、日本全國の稱なる倭の上にも冠らせいふに至れるなり、



こゝも、日本全國の枕詞としたるなり、やは助辭にて、さなみや志賀、忍照や難波などと同じ、用ひかたなり○天地のひらけ始めし昔より 天地の出來し太古よりといふ意、支那にて、天地開闢といふ開闢を、ひらくと讀みて、この世の始をかくいへるなり、正しくは、たゞ天地のはじめといふべし○岩戸をわけて面白き神樂の詞うたひてし 天の岩戸を開けて、面白をかしき神樂の歌をうたひて、日神の御怒を和らげ奉りたりといふ意にて、其の時の事實は、この書の初にいへり、以上まづ和歌の起源をいへり○さればかしく例をてひじりの御世の道しるく、それ故歌の道は、結構の事柄となりて、これによりて、聖帝の御政道も、世にあらはれといふ意なり、かしくは、すべてよき事をいへり、こゝはよき先例手本となりたるをいふ、ひじりは、聖の字の義、しるくはよく見え著はるゝこと○人の心を種として萬の事を言の葉に、これは、古今集の序に、和歌は人の心をたねとして、萬の言の葉とかなれりけると、あるをとりて書けるものにて、心中に浮べる種々の感を、言語に出だして歌ふといふ意なり、言に出だして歌ふ、それに感じて鬼神も哀と思ふと次の句につくなり○鬼神までもわはれとて、最も荒々しき、鬼神なきに至るまで、感服してとなり、とては、といひて、と思ひてなどの意なり○八島の外の四の海波も静かにをさまりて、日本國中は勿論、その外までも、世の中が安穩にてといふ意、八嶋は、日本國の事にて、神代の昔、伊邪那岐伊邪那美の二神、生み給ひし嶋、淡路、四國、九州、壹岐、對馬、隱岐、佐渡、本州の八個なりし故なり、四の海は、四方の海なり、これはいはゆる四海波靜にしてといふを、譯したる詞にて、たゞ世の治れるよしなり○空よ風もやはらかに枝もならさず

るわめも時さだまれば、これも世の無事なることを形容していへるなり、風はそよよと吹けど、枝を鳴らすに至らず、雨も降らぬにはあらねど、猥りならぬ故に、作物を害することなし○さみし〜のみことのまゝにしたがひてわかぬ浦路のもしはぐさかさわつめたるわと多し、歴代の天皇等の勅により、歌集を選びたる先例も數多ありとなり、みことは、勅命御命令なり、まゝにはまにまににて、その通りにするをいふ、わかぬ浦路のもしはぐさは、前々所々にいへる如く、歌の事をいへるなり、浦には、もしはぐさある故に、かくいひ、かくいへる縁にて、かさわつめといひて、選集せし意をあらはしたる、まことに抜目なきいひかたなり、さてこゝまでは、歌の徳をのべて、古より歌は、大切なるものとしたる、よ心を詠みたるなり○それが中にも名をとめて三代までつぎし人の子の、其の中にも、名譽を遺して、三代までも、打續きて歌集を選びし人といふ意にて、次の詞につくなり、三代までつぎしは、前にも見えたる如く、阿佛尼の家筋は、俊成、定家、爲家の三代、打續きて勅命を受け、歌集を選びたる故、かくいへるなり、人の子とは、たゞ人といふに同じ、こゝは古の詞なるが、こゝは次に親のといふ詞に縁故あらせんとていへるなり○親のとりわさゆづりてし、其のまことさへありながら、親が特別に、其の子に譲り與へし確證まであるのといふ意、こゝは爲家が、特に、その子爲相に領地を譲りしことをいふ○思へば賤し信濃なる其の帯木の蘭原に種を蒔きたるとかどてや、よく〜考へて見るにその子は、賤しきわが身を、母に持ちたる殃にてあるべきか、遂に領地を横奪せられたりと、後の詞につくなり、賤し信濃なるは、賤しき信濃なるといふにて、その賤しきは、帯木より蘭原までにかゝりたり、帯

木は、箒に似たる木にて、この木信濃にあるを、遠方より見れば、帚の形したれど、近よりて見れば、いづれが箒の形したりとも見えずとて、昔より名高き物となりたり、蘭原は、この箒木の  
ある邊の地名なり、種を蒔くとは、子を持ちたるをいふ、さて箒木に母といふ意を持たせ、蘭原  
に其の腹といふ意を兼ねたり、とてやは、なるべきかといふことにて、によるべきかなといふ意  
味なり○世にもつかへよいけるよの身をたすけよとちぎりおく、君にも仕へ奉れ、生活のため  
もせよと、約束せられたる、かくくゝの地と、これまた次に續くなり、世にかふるとは、世に  
立ちて大君に仕へ奉る即ち仕官することなり、いけるよの身云々は、この世にある生命にて、平  
たくいへば、命をつなげといふことなり、これは爲家の領地を譲りくれし心持を、説明していへる  
なり○すまごあかしのつゝさなる細川山の山河のわづかに命かけひとて傳ひし水の水上もせよと  
められて、前の如き意味にて與へられたる細川庄を、生命の綱と頼みしに、それを奪ひとられて  
といふ意なり、須磨と明石とは、續きたる地にて、攝津と播磨とに屬せり、細川山といふは、細  
川の庄なる山をいひたるにて、その地即爲家の爲相に與へたる領なり、わづかに命かけひとて  
は、その領地をやうく、生命を維ぎ懸くるものとしたるよしにて、かけひは懸樋にて水を通すも  
の故、山川にも、また水にも縁故あり、それに命をかけといひるよしをも、いひかけたるなり、  
傳ひし水といふも、領地を水になしていへるにて、せよとめらるゝは、やがて横奪せられたるに  
たとへたるなり○今はたゞ陸に上れる魚のこを楫を絶えたる舟のこ寄方もなくわびはつゝ、現  
今は、全く陸上の魚ともいふべく、又楫を失ひし舟ともいふべき、いかにもせんすべく、困り

果てたるといふ意にて、次の子といふ語につゝなり、楫を絶えたるは、梅が羅を懸くつたるに  
て、そは助辞なり、わびはつゝは、困り切るなり○子を思ふと夜の鶴なくく、鶴さしかきか  
く困るわが子を思ふが故に、夜の鶴の如く、鳴ながら都を出でて、鎌倉に訴に奉りしを思ふといふ意、  
夜の鶴のこは、すでにいへり、子を思ひて鳴くもの故、かくよゆり、こゝは阿彌尼の身の上  
たとへたり○身はかすならす鎌倉の世の政しければ聞えあけてし言の葉も枝はこもりて梅の花  
四年の春になりけり、わが身は賤しき上、鎌倉幕府の政事多ければ、訴へし事も其の儘になり  
て、いつしか鎌倉に下りし建治三年より四星霜を経て、弘安三年の春となりてしまへりといふ意  
なり、身はかすならすとは、立派の人は、世間に持難され敷へ立てあるものなれど、賤しき身分  
の者は、ありとも知れぬもの故、賤しきことを、繰返してかくいへるなり、聞難きやてしは、申  
上ぐるといふに同じ、即、訴出でしことなり、枝にこもりて梅の花とは、梅の横梅花葉の冬の間  
閉ちこめられて居る如く、訴訟のそのまゝになり居るよしなり、さてこゝまでは、訴出づる原因  
より、その後までの實事をよめるなり○行方もしらぬなかぞらの風にまかするふらふとは、軒端も  
あれてさゝがにのいかさまにかはなりぬらん、何處に吹きて行くとも知らぬ、大空の風の、暴ら  
すまゝにする故郷は、家の軒端も破損して、いかばかりにかなりたるならんとなり、なかぞらは、  
中空なり、さゝがにのは、いといふにかゝる枕詞なり、いとば蜘蛛の巣をいふなり、またさゝがにと  
は、蜘蛛の事なれば、かく枕言としたるなり、その蜘蛛は又軒端といふに縁ある詞なり、故郷には、楫ふ  
人もあらざるべければ、荒廢して、いかになりゆくことならん○世々の跡める玉つらもさて朽はて

は葦原の道もすたれていかならん。歴世の筆の跡を留りし書類も、そのまゝに朽腐したらば、わが國の道、即歌道も衰へゆきて、いかになることならんとなり、王章のことは、上にいへり、さては、そのやうにありてどの義にて、今のまゝにてといふに同じ、葦原の道とは、歌道といふも同じ、我國は、古、葦原中國と稱せし故に、敷島の道、即和歌の事をかくいひしなり○これを思へば私の歎のみかは世のためもつらき例となりぬべし。これらの事を考ふる時は、わが一身の悲みのみか、又世人のためにも、迷惑の事柄となることならんといふ意にて、のみかは、のみばかりでなく、その上にといふこと、つらきは、憂愁困難な事のことあり、以上は、公私につきて所領を奪ひとられたるを歎くよしなり○行くささかけてさまゝに書きのこされし筆のあと、後々の事までを注意して、細々と書き置かれたる筆跡といふ意にて、爲家卿の遺言状等をさす○かへすゝもいつはりと思はましかば、遺言状は、決して偽りにはあらず、されどもし偽りと思ふ人あらばといふ意にて、かへすゝは、幾度言ひ返すもといふことなり、かへすゝの下に、虚偽にはあらずといふ意を入れて見るべし○ことわりをたゞすの森のゆふしでにやよやいさゝかかけとへ。正しき道理が、いづれにあるかを、神かけて、いさゝか糺し試みよ、然らばその是非分明にならんとなり、たゞすの森は、山城愛宕郡にて、神社あれば、木綿四手といふことをいひ、その木綿はかくるもの故に、かけて問へといへるなり、さて木綿は、今のモメンにはあらず、古楮の木皮にて織りたる布にて、それを多く、神社の御なごにかけ垂らしたるものなり、唾らしきだらする物故、木綿垂といふなり、又たゞすに、理非を糺問する之をかけていひ、その糺の神

は、古より理を正し黑白を判ち給ふことにいひ來れる故、神かけて偽りなきかあるかを糺しみよ、決して偽りなしと、詞をわやなしといへるなり○みだりがはしき末の世に麻はあとなりぬべし、かいらおさしをわすれずは、徳義の廢れし後の世には、まがりたる物のみはびこりて、正直なる物は、跡方もなくなりたりとかいひて、世人を警誡し置さしを忘れずあらば、曲れる事を、誰れか正しき物と取直して見るべきぞと、次の詞にかゝるなり、末の世は、後の世といふに同じく、道德の振はぬ世をいふなり、あさはあとなりといふは、新勅選集に、平泰時が詠める歌とて、世の中に麻はあとなりけり心のまゝの蓬のみしてとあるを引きたるにて、其のまゝは、荀子勸學篇に、蓬生麻中、不扶而直とあるよりいでたり、わすれずは、主として鎌倉幕府の人にかゝるなり○ゆがめる事をまたたれか引直すべきとばかりに身をかへりみすたのむやよ、ゆがめる事は、曲れる事なり、引直すは、取直して正しとするなり、身を願みずは、わが身の賤しきをもかまはずなり、この意は、筋に違ひたる事を、誰れか正しきものと見るべきか、見る人は無かるべし、然らば、わが訴は、道理ぞとの裁判を下さるゝならんと、賤しき身にもかゝはらず、鎌倉の裁決を待ち頼み居るぞとなり○其のよを聞けばさてもさは殘る蓬とかこちてし人の情もかゝりけり、又翻りて、昔の時代の事を聞いて見るに、さてもあさやうに、殘る蓬のかすを斷れと、歎きたる人の心持も、また斯の如く、われと同じかりき、然して、彼は正しき裁許を受けし故、われもまた頼みありといふ意なり、そのよは、その時代にて、下にも見えたる如く、俊成卿の女の訴へなしたる時代なり、のこる蓬とは、末に見ゆる、君ひとり跡なき麻のみをしらば殘るよもぎの

かずをことばれといふ歌の、詞を取りていへるなり、かこちしは、不満足を歎き訴ふるやうの意なり、かくりけりは、かくありけりたて、阿佛尼と同じさまなりきとなり、又思ふに、こは、俊成卿の女の仁恵も、阿佛尼の身の上に及びかくりてありといふにて、爲家は、俊成の後なれば、昔の事を思ひて、かくよめるにもあるべきかおなじはりまのさかひとて一つながれを汲みしかば、彼も播磨、此も播磨、同じ國の境内なる上、同じ系統を引きし故にといふ意にて、俊成の女と、阿佛尼との似よりたる事をいふなり、そは、俊成の女のは、播磨の腰部庄、これは細川庄、その上同じ系統にて、歌の道にも携り、同じやうに領地を奪はれしことを、鎌倉に訴へたればなり、一つながれといひしは、下の野中の清水といふ事に縁故あらせんためなり○野中の清水よとむともとの心にまかせつゝ、野中の清水は、播磨國印南野にあり、よとむは、濁ることにて、正しさが曲れるに、蔽はれたるよしを含みいへるなり、もとの心にまかすは、もと爲家の興へしまゝにかへすと、一度清水の濁るとも、濁らぬ以前に立返らせ正しさを正しとすると、二つを兼ねていへるなり、つゝは、てと同じ○とてはりなき水茎のあとさへあらば、確實なる證書だにありたらばといふ意にて、水茎は、筆をいへるなれば、その跡は、書き物なり、又このさへは、後世にいふさへと同じく、だにの意味なり○いとしくつるがをがべの朝日かけ八千代の光さしそへて、こは、鎌倉幕府の、旭日の登るが如く、榮えゆくらんと、祝ひていへるにて、いとしくは、愈々益々なり、鶴岡は、鎌倉の氏神を祭る地なれば、この岡に登る朝日が、幕府の幾千歳も榮ゆべき光を、あらはし示せるよしをいひて、祝ひたるなり、さて上の、あとさへあらばと

ふ次に、訴訟は阿佛尼の勝に歸するよしの意を含めて見るべし、實は、明にその意を歌ふべきなれども、憚りて世の榮をいひたるなるべしそは始に、和歌の徳をいひて、天下大平なるよしをいひ置きたる故、阿佛尼勝たば歌道盛んになり、歌道盛んにならば、世愈々治らむ、故に世の治まるをいふは、わが勝つ所以をいふ道理となればなり○明らけき世のなほもさかえむ、政道明かに正しき御代の、益々立ち榮えゆくらんとなり○ながかれと朝夕の君が代をやまこととばに今日ぞのべつる、大君の御代の、長久に榮えませと、常に願ふ處の心を、和歌に今日詠じましてごさりまするといふ意にて、長かれは、長くわれといふことなり、さてこの後につけたる一首の歌は、反歌といひて、萬葉集の長歌なほにも、數多見えて、或は上の長歌の意を繰返し、又は別の意を詠みそへたるもあるものなり、又古の長歌は、五七の調なりしを、この頃よりのは、さにあらず、多く七五なり、故にこの歌も、始は五字より起したれど、七五となりたれば、その意して見るべし

残る蓬さかこちけるといふ所の裏書に、皇太后宮の大夫しゆんぜいの卿の御女、父のゆづりきて播磨國こしへの庄といふところを、傳へしられけるを、地頭のさまたげ多くて、昔武藏の前司へ、こころなる訴訟にはあらで、まるらせられけるうた、新勅選にも入り侍るこやらん、心のまゝの蓬のみしてといふ歌を、かこちて申されける歌

君ひこり跡なき麻のみをしらば

残る蓬がかすをこはれ

こよまれければ、評定にも及ばず、廿一かでのうの、地頭のひほうを、みなごんめ  
られて候ひけり。その後、野中のしみづをすくごて

わすられぬもこの心のありがほに

野中のしみづかけをだにみし

こよまれたるも、そのこしへの庄へ、くだられける時の歌にて候ふ、新勅選に  
入りて侍りし

永仁六年三月一日書之

○この文は、後人の書加へたるものなれども、本文の意味を解するに便あれば、一通り講義す  
べし○残る蓬とかちけるといふ所の裏書に、裏書とは、巻物などの書の、紙の裏に註の如く  
に書添へおくものをいふなり、前の歌に、残る蓬云々とあるその裏に、次の如き文句ありとな  
り○皇太后宮の大夫、役の名にて、皇太后宮の事を掌る長官○俊成卿の女、實は姪なれども、  
歌道の譽ありし故、女と稱せしなりとぞ、越部禪尼ともいふ○傳へしられけるを、受傳へて所  
領とせしよしなり○地頭の妨おほくて、土地支配人の障をすること多ければといふ意にて、地  
頭は、頼朝の時に置さしものなり○昔武藏の前司へことなる訴訟にはあらで參らせられける歌  
云々、武藏の前司は、北條泰時なり、前に武藏守たりし人ゆゑかくいふなり、ことなる訴訟とは、  
特に訴訟がましき程のことにはあらずしてといふ意なり○新勅選にも入り侍るとやらん、新勅

選は、後堀河天皇の御時、定家卿の選べる歌集なり、その中に、次の泰時の歌が入りたりと聞  
けりとなり○心のまゝの蓬のみしてといふ歌をかちて申されける歌、心のまゝの云々といふ  
歌は、新勅選十七の巻に、平泰時の詠める、題知らずの歌に、世の中に麻はあどなくなりけ  
り心のまゝの蓬のみしてといふあり、それを指せるなり、その歌の意は、恣に我儘なる曲りくね  
りたる蓬のみ、世の中に生ひ繁りて、姿正しく真直の麻は、跡方もなくなれりとなり、即邪人跋  
扈して、善人のあらぬを欺じてよめるなり、この歌につき、俊成卿の女が、次の如き歌を詠  
みて、不平を訴へたるよしなり○君ひとり云々、君ひよりは泰時を指す、麻のみは、麻の實と、  
麻の如く正しき俊成の女の身とを、兼ねていへるなり、残る蓬が数とは、数々多く世に蔓れる  
邪曲の人どもをいふ、一首の意は、貴方が昔てよみ給ひし如く、世には邪なる事の多ければ、  
幸にわが身の正しさを知り給はば、残り蔓る、数々の蓬の如き曲れる人々の罪を糺し給へとな  
り○評定にも及ばず、泰時役人とも評議するまでもなく直くに○廿一かでのうの地頭の非法を  
皆とめられて候ふなり、廿一箇條もある、多くの不都合の行を、皆禁じて、地頭の罪を正し  
たるなり○野中の清水、上にいへり○わすられぬ云々、こは地頭の非法なくなりしよしを讀め  
るなるべし、わすられぬもとの心とは、持ちて生れし天然自然の心といふにて、善心なり、あ  
りがほには、有るが如き様子に思はるゝをいふ、だにみしは、ダケニテモ見えしか、少かも見え  
ずとなり、一首の意は、邪曲の地頭等も、さすがに、人の本性のあるものと見えて、今は昔と違  
ひ、惡しき風は少かだになしとなり、もとの心、かげなほは、皆この清水に縁ある語なり、古今

集に、古の野中の清水ぬるけれど、もとの心をしる人ぞくじどあり○その越部庄 其の訴へたる越部庄といふ義なり○新勅選云々 今の勅選集には、見えず、續古今の誤りなるべきか○永仁六年云々 伏見天皇の御代にて、弘安三年よりは、十八年ほど後なり

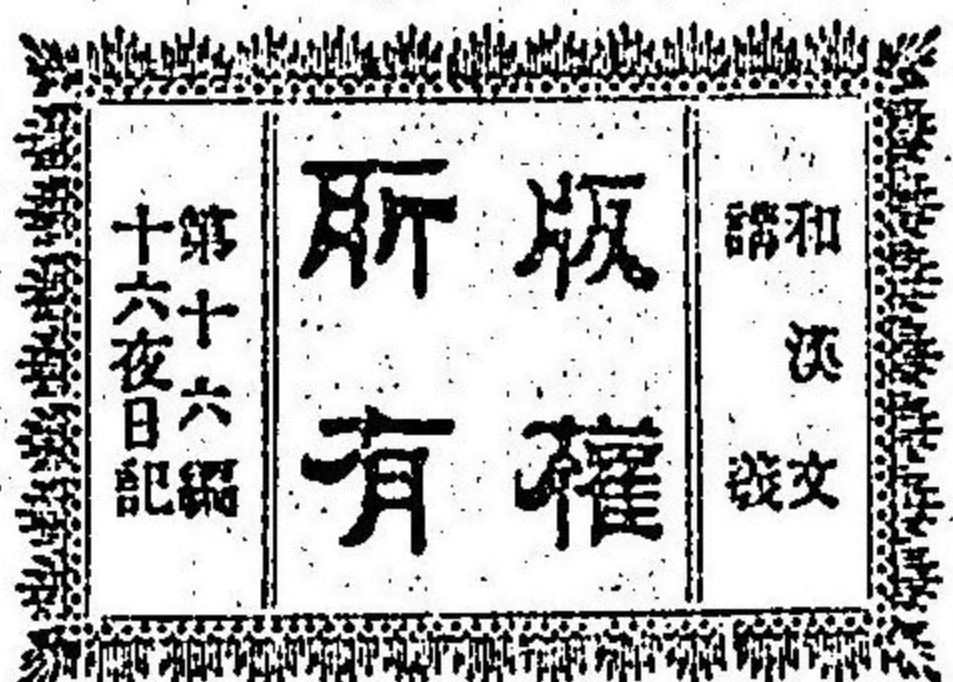
此のあぶつばうご申す人は、定家の息、爲家の室なり、きんたち五人まじく候ふ、はりまの國細川の庄を、爲家よりゆづりおかれ候ふを、爲氏、他腹によりて押領候ふ訴訟のために、鎌倉へ下られ候ふ時の、道の日記にて候ふ、爲氏も、陳状のために鎌倉へ下向、兩人ともに、鎌倉にて死去せられし、訴訟は爲氏のかたへはつけられず候ひしこそ、あぶつばは、安嘉門院の四條ご申す人なり、爲相の母なり

○これも、後人の書き加へしものなるが、異なることもなければ、註せず

### 十六夜日記講義終

明治廿九年十月一日印刷同月五日行  
明治卅四年十月十五日第八版發行

定價金廿錢



講述者	三木五百枝
發行者	東京市神田區西船場町壹番地 伊藤岩治郎
發賣所	東京市神田區今川橋通北 誠之堂書店
印刷者	東京市京橋區築地三丁目十五番地 野村宗十郎
印刷所	東京市京橋區築地二丁目十七番地 株式會社東京築地活版製造所

增訂校田于信標註  
標註徒然草 賣價金廿錢 郵稅四錢

增訂校田于信標註  
標註土佐日記 賣價金拾錢 郵稅貳錢

上田胤比古標註 今泉定介校閱  
正訂校田于信編 增田于信編  
新編紫史 大效正本居豐類閣

賣價金八錢 郵稅貳錢  
第四編より既刊  
和定本七拾五錢  
定本七拾五錢  
拾五錢各郵稅六錢

一名通俗源氏物語

注意

本館發行... 凡購者... 注意

中等和漢文講義書類 既刊書目

- 第一編 正文章軌義... 第二編 徒然草講義... 第三編 大學及中庸講義... 第四編 伊勢物語講義... 第五編 伊勢物語講義... 第六編 竹取物語講義... 第七編 日本外史講義... 第八編 百人一首講義... 第九編 尚友錄講義... 第十編 日本政記講義... 第十一編 和文讀本問答... 第十二編 孟子講義... 第十三編 土佐日記講義... 第十四編 孝經講義... 第十五編 和漢文質疑問答... 第十六編 十六夜日記講義... 第十七編 神皇正統記講義... 第十八編 古今和歌集講義... 第十九編 掛象周易講義... 第二十編 枕の草紙詳解... 第二十一編 羽山尚書講義... 第二十二編 詳解小學講義... 第二十三編 平家物語講義... 第二十四編 新編紫雲史... 第二十五編 和漢文質疑問答... 第二十六編 保元物語講義... 第二十七編 保元物語講義...

發行所 東京市神田區 鍛冶町四番地 (電話本局九百四十九番) 誠之堂書店

太平記

本文原本 高尚和裝半紙判 全四十卷 紙數一千二百頁 正文四號活字

太平記註釋

全二册 高尚和裝半紙判 紙數六百八十頁 正文四號活字

本館の... 忠臣義士... 太平記の... 註釋の... 凡購者...







今泉定介先生校正  
島山健先生校正

### 御伽草子

本書は既に世人の知る如く室町時代の前後に  
いでは短小の如く室町時代の前後に  
て何れも珍奇話のみ故に其味は普通の體を  
に勝る事遠く文章は尤優麗にして一種の體を  
なせり其の目左の如し

この書は板本あれども今は板絶えて印本甚少  
しよりて兩先生にこれに校訂を行せられ紙  
價爲に貴かりしも一時品切れと成り居りしに  
此度更に刊行する所なり

- 第一 小野小町
- 第二 廣末草子
- 第三 七草子
- 第四 始物
- 第五 二十四孝
- 第六 浦島太郎
- 第七 一寸法師
- 第八 浦島太郎
- 第九 一寸法師
- 第十 浦島太郎
- 第十一 一寸法師
- 第十二 浦島太郎
- 第十三 一寸法師
- 第十四 浦島太郎
- 第十五 一寸法師
- 第十六 浦島太郎
- 第十七 一寸法師
- 第十八 浦島太郎
- 第十九 一寸法師
- 第二十 浦島太郎

### 新編御伽草子

この書は御伽草子の續編として古人の編次を  
未だ世に出でざるもの今秋野先生の秘蔵本に  
て未だ世に出でざるもの今秋野先生の秘蔵本に  
註を請ひて新刊し前編と併せて國文學界の雙  
璧となれり其の目左の如し

抑この御伽草子の二篇は徳川文學の種子とも  
好いふべきものにして是利時代の文學を研究する  
の材料なり而して世に刊行せざれば其の  
は國文學の歴史を研究せんば珍本なり

- 第一 小野小町
- 第二 廣末草子
- 第三 七草子
- 第四 始物
- 第五 二十四孝
- 第六 浦島太郎
- 第七 一寸法師
- 第八 浦島太郎
- 第九 一寸法師
- 第十 浦島太郎
- 第十一 一寸法師
- 第十二 浦島太郎
- 第十三 一寸法師
- 第十四 浦島太郎
- 第十五 一寸法師
- 第十六 浦島太郎
- 第十七 一寸法師
- 第十八 浦島太郎
- 第十九 一寸法師
- 第二十 浦島太郎

東萊博議 深井鑑一 二拾編 註校

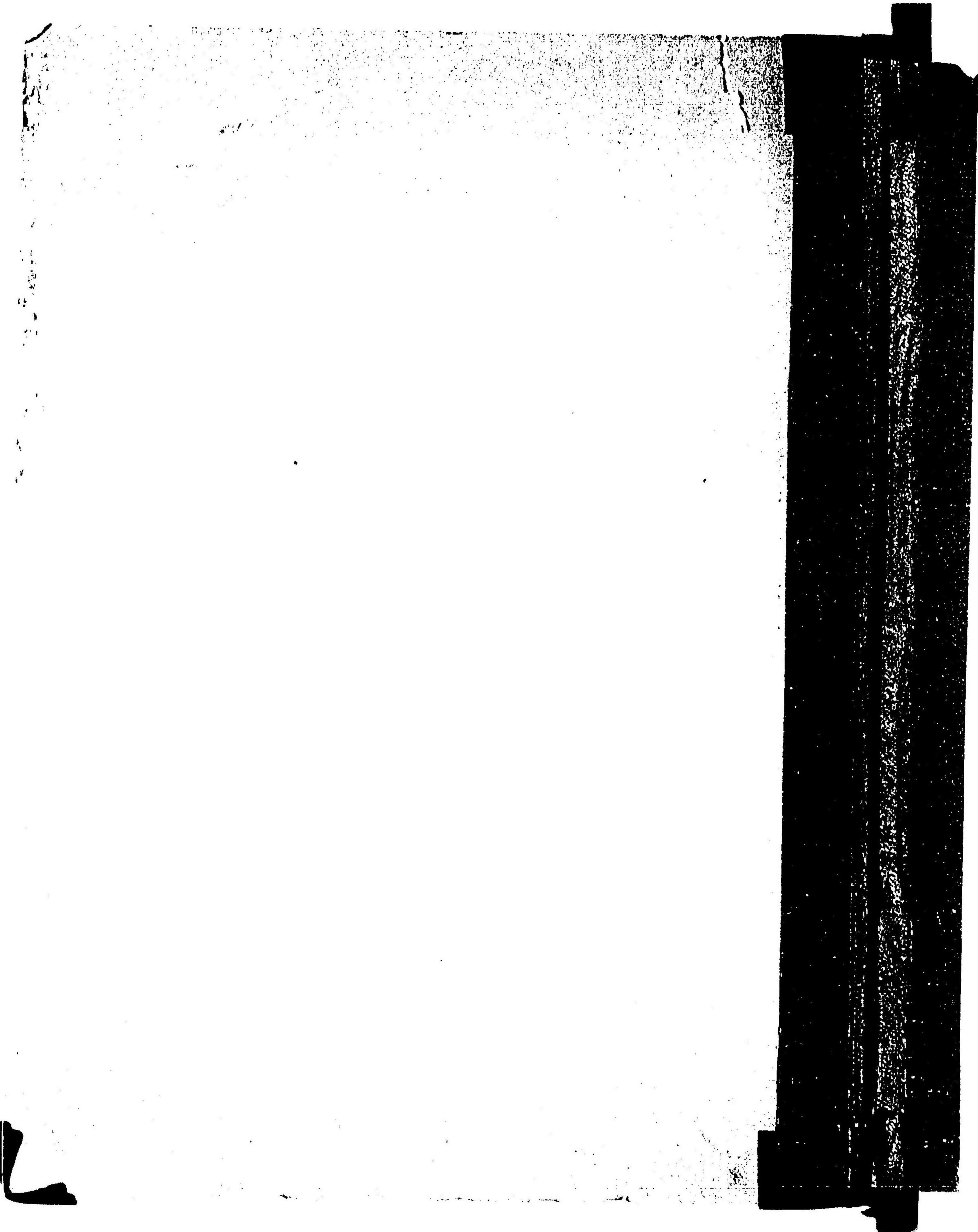
### 東萊博議

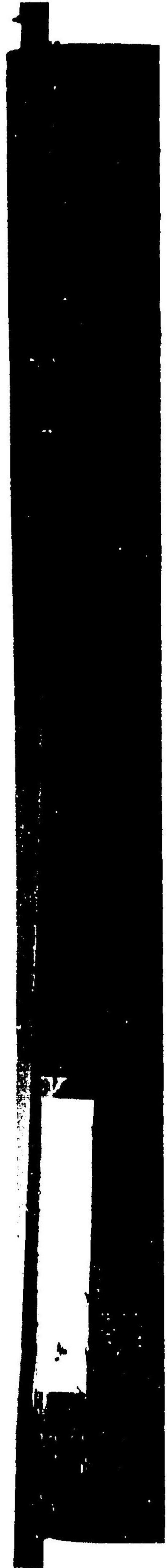
東萊博議は有名なる宋  
の呂祖謙が春秋左氏傳  
中に就きて治亂興亡正  
邪淑慝の論を辨じ其文  
絶妙の史論にして其文  
章は韓潮蘇海の外に一  
機軸を出たし流麗奇警  
の妙文なり今般野翁  
堀大に増補先生に請ひ  
て大に増補校訂する所  
あり(一)標校(二)註  
(三)訓點(四)段落(五)  
讀を假し(六)文法(七)  
ち(五)文法(四)段落(三)  
讀を假し(六)文法(七)  
私立を以てて少文の苦  
及檢定校中試考を以て  
各六錢

- 東京府立城北深井鑑一耶講述  
中學校講師
- 大學及中庸講義 合本全一冊 正價金八十五錢
- 花輪時之輔講述 深井鑑一耶編
- 挿論語講義 全二冊 正價金七十錢
- 孟子講義 全二冊 正價金六十五錢
- 四書講義 全二冊 正價金七十五錢

以上合本全五冊 小包便紙四百日







7



915.44

M467i

(8)

十六夜日記講義

国立国会図書館

095796-000-8

915.44-M467i(8)

十六夜日記講義

三木 五百枝 / 述

M34

DBR-0003

